

寺家遺跡

一般国道249号交通安全施設整備(一種)工事に係る

—第13次発掘調査報告書—



寺家遺跡全景と通称

2000

石川県羽咋市教育委員会

寺 家 遺 跡

—第13次発掘調査報告書—

2000

石川県羽咋市教育委員会



寺家遺跡周辺俯瞰



1. 調査区から邑知地溝帯を望む



2. 西側調査区全景（南より）

目 次

例 言	Ⅲ
第 1 章 遺跡とその周辺	1
第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	2
第 2 章 調査の経緯と経過	7
第 1 節 過去の調査と成果	7
第 2 節 調査の経緯	11
第 3 節 調査の経過（日誌抄）	13
第 3 章 遺構と遺物	15
第 1 節 調査の概要	15
1. 調査区設定	15
2. 包含層の概要	15
第 2 節 遺 構	19
1. 第 1 層の遺構	19
2. 土塁	19
3. 第 2 層の遺構	23
4. 第 2 層下層の遺構	23
5. 基盤砂層の遺構	24
第 3 節 遺 物	28
第 4 章 おわりに	33

挿 図 目 次

第1図	位置と地形概念図	1
第2図	周辺道路分布図 (1/25,000)	3
第3図	調査区位置図 (1/2,000・1/5,000)	8~10
第4図	工事区域と発掘調査位置図 (1/500)	12
第5図	調査区全体図・区割図 (1/200)	16
第6図	西側調査区東壁面土層断面図 (1/60)	17
第7図	西側調査区土層平面図 (1/150)	18
第8図	西側調査区下層全体図 (1/200)	19
第9図	西側調査区平面図 1 (1/60)	20
第10図	西側調査区平面図 2 (1/60)	21
第11図	土層断面図 (1/60)	22

第12図	東側上面遺構平面図土層断面図 (1/60)	23
第13図	東側調査区平面図 1 (1/60)	24
第14図	東側調査区平面図 2 (1/60)	25
第15図	西側調査区下層平面図 1 (1/60)	26
第16図	西側調査区下層平面図 2 (1/60)	27
第17図	各遺構土層断面図 (1/60)	28
第18図	出土遺物 1 (1/3)	29
第19図	出土遺物 2 (1/3・1/1)	31
第20図	出土遺物 3 (1/3)	32
第21図	砂田地区N区の土層との位置関係図 (1/2,000)	33

表 目 次

第1表	周辺道路地名表	4
第2表	周辺道路地名表	5
第3表	周辺道路地名表	6

第4表	寺家遺跡の調査経過	11
第5表	出土遺物観察表 (1)	35
第6表	出土遺物観察表 (2)	36

図 版 目 次

巻頭図版 1 寺家遺跡周辺俯瞰

巻頭図版 2 1. 調査区から邑知地溝帯を望む

2. 西側調査区全景 (南より)

図版 1 調査区俯瞰 (南東より)

図版 2 1. 調査区俯瞰 (北西より)

2. 調査区全域空中写真

図版 3 1. 表土除去後の土層 (南より)

2. 表土除去後の土層 (北より)

図版 4 1. 上層の遺構検出状況

6~8. 土層上の遺物

2~5. 鉄溝とPit

図版 5 1. 西側調査区全景 (北西より)

2. 西側調査区全景垂直写真

図版 6 1~3. 西側調査区土層垂直写真 (1)~(3)

図版 7 1~3・5・7. 土層盛土状況

4. SD01と包含層 (EFセクション)

6. SD01・02 (GHセクション)

8. Pit層土 (3区)

図版 8 1. 土層全景 (南より)

2. 土層全景 (北より)

図版 9 1. 東側調査区全景垂直写真

2. 第1層の遺構

3・4. 鉄溝検出・完掘状況

5. 東側の調査区土層堆積状況

図版 10 1・2. 改修前の土層

3~5. SD02

図版 11 1~3. 西側調査区下層垂直写真 (1)~(3)

3・4. SD03・04

図版 12 1・2. 下層の遺構

7・8. その他の遺構

5・6 SK01

図版 13 1. 西側調査区下層全景 (南より)

2. 西側調査区下層全景 (北より)

図版 14~16 出土遺物 1~3

例 言

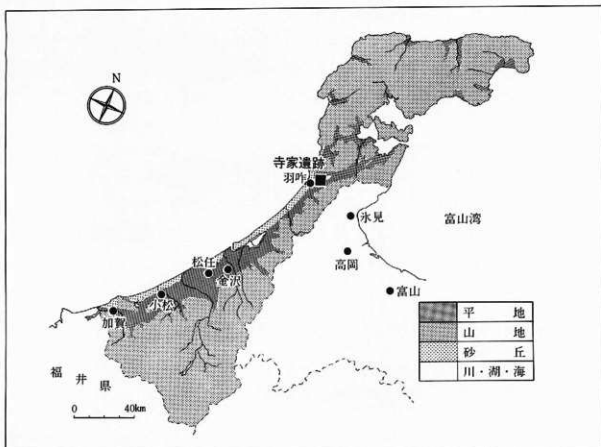
1. 本書は石川県羽咋市寺家町から柳田町にかけて所在する「寺家遺跡」の第13次発掘調査報告書である。
2. 本調査は一般国道249号交通安全施設等整備事業に係るもので、石川県（石川県羽咋土木事務所）から委託を受けた羽咋市（羽咋市教育委員会）が実施した。調査費用は石川県土木部道路整備課が負担した。
3. 現地調査は平成9年度に実施し、羽咋市教育委員会文化課職員の協力を得て、同主事坂元 勇（現：羽咋市農林水産課主事）が担当した。また、調査に係る事務と調整は同主幹谷内碩央（現：文化財室次長）があたった。
4. 現地調査期間は平成9年8月25日から同年12月9日まで延べ66日間を要した。
5. 出土品の整理および報告書作成に必要な記録資料整理にあたっては、平成8・11年度に実施し、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレース作業を能山真登加、上田郁代、上井直子、井上育子、古池理恵子が行い、遺物写真撮影を文化財室主査出口成治、その他を同嘱託宮下栄仁が担当し吉野輝子の協力を得た。
6. 本書の遺構・遺物挿図などの表示は以下のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
 - (2) 方位はすべて真北を示している。
 - (3) 水平基準は海拔高を示している。
 - (4) 本文中に挿図遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。
 - (5) 土器実測図の断面は須恵器を黒塗り、その他の土器類を白抜きで示した。またスクリーントーンは赤彩を示している。
 - (6) 遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑 SD：溝 PitおよびP：柱穴および小穴
7. 発掘調査および出土品整理・報告書作成にあたっては、次の方々や諸機関からご教示とご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。（敬称略・順不同）
小嶋芳孝・北野博司・中條茂雄・堀田成雄・中越照次・林 茂清・山下周司・石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター（現：財団法人 石川県埋蔵文化財センター）・石川県羽咋土木事務所・柳田町会・土田組・古永建設・前田基礎
8. 本書の執筆・編集は宮下が担当した。
9. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあっている。

第1章 遺跡とその周辺

第1節 地理的環境

寺家遺跡が所在する石川県羽咋市は、能登半島の基部西側に位置している。羽咋市域は、西北部に標高50～120mの低平な眉丈山丘陵が北東に伸び、南東部には本市内の最高峰である標高461mの碁石ヶ峰を有する石動山丘陵が連なる。これらの丘陵にはさまれるように七尾から羽咋に至る幅3～4kmで能登半島中央部を斜めに横断するいわゆる邑知地溝帯は、半島屈指の穀倉地帯である。また、冬鳥とくに白鳥の飛来で知られる邑知潟は典型的な海跡湖であり、干拓以前は石川県下で河北潟に次ぐ湖沼であった。現在は長曽川と羽咋川を結ぶ水路としての広がりしか残っていない、その面積は86haにすぎない。

一方、日本海に面する西側では、河北郡高松町の大海川から本市一ノ宮町に至る延長12km、幅1kmをこえる羽咋砂丘（海岸砂丘）が発達している。この砂丘の形成は、内陸側より順に縄文時代前期に形成された内列砂丘、同中期初めの中列砂丘、そして弥生時代末から古墳時代初頭に形成された外列砂丘の3列に区分することができる。これらの砂丘で形成される海岸線も最近では浸食が著しく見られる。このため一ノ宮海岸ではテトラポット等の波消しブロックを海中に並べ浸食を防ぐ努力がなされている。



第1図 位置と地形概念図

第2節 歴史的環境

羽咋市は、前節の地理的環境とも相まって豊かな生産域と交通の要衝として、歴史上で口能登の拠点として位置づけられてきた。特に羽咋砂丘の北端から眉丈山丘陵に広がる海岸段丘一帯に多くの遺跡が分布しており、古代羽咋の中心域であったことが遺跡の性格からも示されている。

時代に沿って概観すると、羽咋市ではまだ旧石器時代の遺跡は確認されていなく、最古のものは気多大社僧坊群遺跡で出土した縄文前期前葉の土器群がある。この周辺で縄文時代の遺跡が散見され、落とし穴が発見された柳田シャコデ遺跡や寺家遺跡がある。また近年、柴垣須田の砂取り現場から縄文時代から中世の複合遺跡が発見されている。今後、調査が進めば同時代の遺跡も増加するものと思われる。

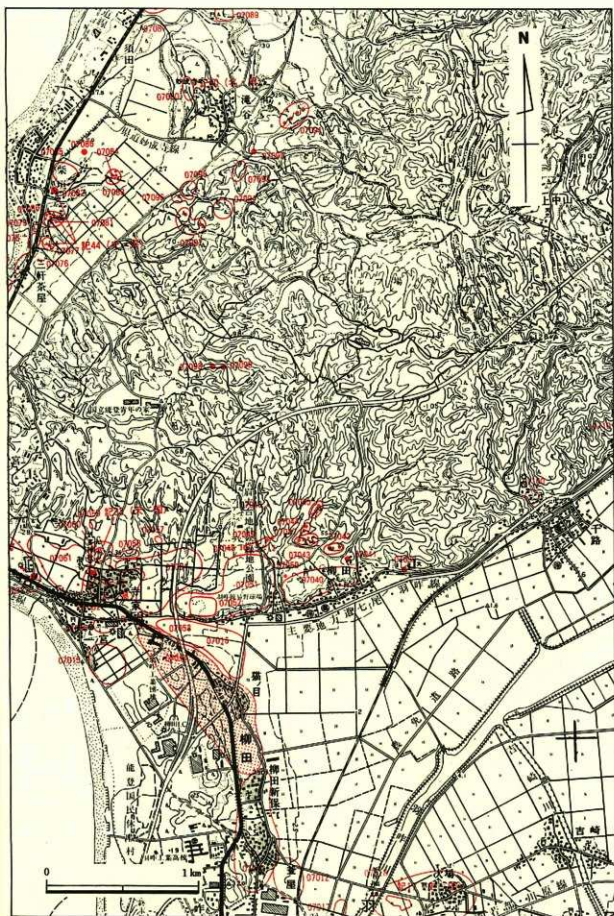
弥生時代にはいると、それまで居住に適していなかった邑知湯周辺の微高地に、かなり大規模な集落が営まれるようになる。中でも吉崎・次場遺跡は、遅くとも前期新段階には集落が成立し、以降古墳時代初頭に到るまで中核的集落として営まれていたことが確認されている。また、砂丘地帯でも弥生時代中期から後期の兵庫オクヤマデ遺跡、寺家遺跡、柴垣須田遺跡などが点在する。

古墳時代になると、これまで様相がはっきりと掴めていなかった前半が、太田ニシカワダ遺跡の調査で好資料が得られている。漆工関係土器群など工房的集落としての性格が濃厚であると推察され、吉崎・次場遺跡から継続する集落と見なされている。後期以降になると寺家遺跡周辺で集落の営みが確認され、南端部では6世紀前半に中心部の祭祀活動に先行する様相の集落の存在が明らかとなった。一方古墳は、北部海岸段丘部に滝大塚古墳に代表される滝古墳群、柴垣古墳群、柳田古墳群などがまとまって造営されている。南部砂丘上には羽咋古墳群、新保ゼンボン古墳群が、また東部の志雄周辺の丘陵部に集中している。須恵器生産もすでに該期に始まり、柳田古墳群周辺丘陵の開折谷で県内でもかなり早い時期の5世紀末ごろから8世紀中ごろまで継続的に操業が行われている。

奈良・平安時代以降になると、北部砂丘上に気多神社と深く関係した寺家遺跡やシャコデ廃寺などの活動が活発となり、羽咋地域の中核的状況の様相を強める。また羽咋中央部の吉崎・次場遺跡や長者川遺跡から発見された墨書土器などの出土品から官衛や群衛との関係が注目される。一方、羽咋市北東部にあたる余喜地区では、四柳白山下遺跡、四柳ミッコ遺跡、大町ダイジウ遺跡などの調査成果から墨書土器をはじめ多彩な遺物や遺構が検出され、古代官道沿いの遺跡として注目されている。

参考文献

- 『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1986・1988 石川県立埋蔵文化財センター
- 『吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査』1994 石川県羽咋市教育委員会
- 『新保ゼンボン遺跡』1994 石川県羽咋市・石川県羽咋市教育委員会
- 『太田ニシカワダ遺跡』1999 石川県羽咋市教育委員会



第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表1

遺跡番号	住所	名	所在地	所在地通称	種類	現状	立地	時代	出土品	調査	文献
		茶屋敷ノ下遺跡	羽村市多摩町	森ノ下	散在地	田・畑・宅地	平地	平安～中世	須田君、土師器、麻布織	1984.87年、市教育委員会調査	1362, 1364, 1628
07013		茶塚遺跡	羽村市多摩町・駒込町		散在地	畑・宅地	砂丘	縄文～古墳	土器、石器、刀子	1988年市教育委員会調査	282, 3428
07014		寺家遺跡	羽村市寺家町・駒込町	聖徳寺跡	宅地・畑	砂丘	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、古墳土器、土師器、中世銅器、銅製品、鉄製品、三好、ガラス製品	1977～80, 85年市教育委員会調査、縄文センター発掘調査、1400～85.87.89.91年市教育委員会調査	988, 1011, 1025, 1218, 1413, 1567, 1629, 1775	
07015		寺家跡の遺跡	羽村市寺家町		散在地	工場用地・畑	砂丘	弥生	弥生土器	工場用地造成地内調査	1544
07016		駒込区ノ下遺跡	羽村市駒込町・寺家町	新ノ目・キモツキ・オキヤ	散在地	畑・畑	平地	縄文～中世	土器、石器、金銅製品	1979.1979年、市教育委員会センター発掘調査	765, 1413, 1547, 1629, 1834
07017		東宮尾遺跡	羽村市東宮尾町		散在地	田	平地	弥生	弥生土器	1992年市教育委員会調査	
07018		古崎・北端遺跡	羽村市古崎町・北端町・駒込町		散在地	田・畑・宅地	平地	弥生～中世	土器、土製品、石器、金銅、玉、古銭	1958年39年度調査、63年市教育委員会調査、79.82.86.91年市教育委員会調査、91年市教育委員会調査、91年市教育委員会調査	425, 524, 765, 872, 911, 1080
07019		駒込ヒギンダ1号遺跡	羽村市駒込町	ヒギンダ	築跡	宅地	丘陵斜面	不詳			
07040		駒込区ノ下2号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	散在地	田	台地	弥生・奈良・平安	弥生土器、弥生土器、弥生土器、弥生土器、弥生土器、弥生土器	1958年39年度調査、71年市教育委員会調査	321, 872, 765, 1834
07041		駒込区ノ下3号遺跡	羽村市駒込町	宮ノ山	古墳	林地	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07042		駒込区ノ下4号遺跡	羽村市駒込町		古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07043		駒込区ノ下5号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		319, 765, 1834
07044		駒込区ノ下6号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07045		駒込区ノ下7号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07046		駒込区ノ下8号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07047		駒込区ノ下9号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07048		駒込区ノ下10号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07049		駒込区ノ下11号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07050		駒込区ノ下12号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07051		駒込区ノ下13号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07052		駒込区ノ下14号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07053		駒込区ノ下15号遺跡	羽村市駒込町	ウツノ	古墳	山林	丘陵	古墳	古墳土器		765, 1834
07054		気多社跡の遺跡	羽村市寺家町	チャウエミジ、フナイ、ムキヤイ等	散在地	田	台地	縄文～中世	土器、石器、金銅製品	1977.78.84年、市教育委員会調査	348, 1290, 1363

第2表 周辺遺跡地名表2

遺跡番号	地番	名 称	所在地	所在施設	種別	現 状	立 地	時 代	出土品	周 辺	文 献
07055		寺家モスケ古墳	沼津市寺家町	モスケ	古墳	墳	台地端	古墳	埴輪器、金環、ガラス土玉	横穴式石室、1991年、平家寺遺跡調査	1752,1834
07056		一ノ宮御用所跡	沼津市一ノ宮町	御用所	宅地	平地	中央	奈良	土、瓦		304
07057		大塚町中世墓	沼津市寺家町	大塚町	山形	丘陵端	中央	近世前、陣羽織、人骨			1295
07058		寺家中世墓	沼津市寺家町	寺家町	墳墓	田	丘陵端	中世			
07059		一ノ宮古墳跡	沼津市一ノ宮町	古墳跡	山形	丘陵	端	縄文	埴輪石片		
07060	1	筑多1号中世墓	沼津市寺家町	墓	雑地	丘陵	中央	中世		石室	785,1413
	2	筑多2号中世墓	沼津市寺家町	墓	雑地	丘陵	中央	中世		石室	
07061		一ノ宮遺跡	沼津市一ノ宮町・寺家町	一ノ宮町	集落跡	田	台地	古墳～中世	埴輪器、土師器、高麗瓦	1978,79年、西農大発掘調査	919,1036
07062		新宮町跡	沼津市寺家町	新宮町	田・田	台地	不詳	縄文	埴輪		
07063		不動町跡	沼津市一ノ宮町	不動町	住宅所	平地	中央	中世	埴輪、土師器、土師印等		
07064	1	溝1号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	山形	台地	古墳	戸田神社、道徳寺	戸田、径20m		453,479,785,1114
	2	溝2号墳	沼津市一ノ宮町	内陸	山形	内陸	古墳	戸田神社、道徳寺(古墳)	戸田、径20m、横穴式石室		
	3	溝3号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	田	台地	古墳	道徳寺、長刀2、銅鏡、馬具	戸田、横穴式石室、1979,80年調査発掘調査		453,479,785,1036,1114,1834
	4	溝4号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	田	台地	古墳	天石、道徳寺	戸田、径15m、銅鏡		453,479,785,1036,1114
	5	溝5号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	宅地	台地	古墳	戸田神社、石村	戸田、径50m、銅鏡		
	6	溝6号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	田	内陸	古墳	戸田神社、道徳寺	戸田、径20m		
	7	溝7号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	田	内陸	古墳	道徳寺	戸田、銅鏡		
	8	溝8号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	山形	台地	古墳		戸田、径15m		1036,1114
	9	溝9号墳	沼津市一ノ宮町	古墳	山形	台地	古墳		自然地形の可能性あり		
	10	溝大塚古墳	沼津市寺家町・一ノ宮町	古墳	山形	台地	古墳	戸田神社、与志、道徳寺、(石室)	戸田、径50m、厚石、横穴式石室		785,1036
	11	溝ブンニョ山古墳	沼津市寺家町	ブンニョ山	古墳	宅地	台地	古墳		厚石、1957年調査	1123
	12	溝山神社古墳	沼津市寺家町	山神社	雑地	内陸	古墳	土師器、道徳寺	戸田、径20m、厚石、銅鏡		785,1036
07065		溝ゲンギ山古墳	沼津市寺家町	ゲンギ山	古墳	田	内陸	古墳	石村	戸田、径20m、銅鏡	785
07066	1	溝オーショージ1号墳	沼津市寺家町	オーショージ(大塚町)	古墳	田	台地	古墳	埴輪器	戸田、横穴式石室、銅鏡	785
	2	溝オーショージ2号墳	沼津市寺家町	オーショージ(大塚町)	古墳	田	内陸	古墳	埴輪器、土師器、土師印、銅鏡	戸田、横穴式石室、銅鏡	
	3	溝オーショージ3号墳	沼津市寺家町	オーショージ(大塚町)	古墳	田	台地	古墳	埴輪器、土師器、土師印	横穴式石室、銅鏡	
	4	溝オーショージ4号墳	沼津市寺家町	オーショージ(大塚町)	古墳	田	台地	古墳	埴輪器、土師器、土師印	横穴式石室、埴輪器、銅鏡	
	5	溝オーショージ5号墳	沼津市寺家町	オーショージ(大塚町)	古墳	田	台地	古墳	埴輪器、土師器、土師印、銅鏡	横穴式石室、銅鏡	
07067		溝・奥羽製塩遺跡群1地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	奈良・平安	奈良・平安	埴輪器、土師器、製塩土器	1990年、富山大学発掘調査	785,1828
07068		溝・奥羽製塩遺跡群2地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	奈良・平安	奈良・平安	埴輪器、土師器、製塩土器	1970年、市立調査、89,90年富山大学発掘調査	785,1729,1828
07069		溝アゲミズ古墳	沼津市寺家町	古墳	林	台地	古墳			横穴式石室(横穴式石室)、全長30m(『石川考古』第97号)	1114,8063
07070		溝・奥羽製塩遺跡群3地区	沼津市寺家町	製塩跡	田	台地	不詳	埴輪器、土師器			1295
07071		溝・奥羽製塩遺跡群4地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	不詳	埴輪器、土師器、製塩土器			785
07072		溝・奥羽製塩遺跡群5地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	不詳	埴輪器、土師器			785
07073		溝・奥羽製塩遺跡群6地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	不詳	埴輪器、土師器			785
07074		溝・奥羽製塩遺跡群7地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	不詳	埴輪器、土師器			785
07075		溝・奥羽製塩遺跡群8地区	沼津市寺家町	製塩跡	草地	海岸低丘陵	古墳・平安	埴輪器、土師器、製塩土器			785
07076		奥羽製塩遺跡群9地区	沼津市寺家町	古墳	山形	台地	内陸			前方後円墳、銅鏡	785

第3表 周辺遺跡地名表3

調査 番号	社 番号	名 称	所在地	所在地番	種別	現 状	立 地	時 代	出 土 品	備 考	文 献
00277		豊田王塚古墳	沼門市豊田町		古墳	社地・山林	台地	古墳	須磨石	県指定古墳。1970年市 文書調査指定。東 方後円部、全長35m。 横穴式石室。墓石。	229, 435, 311, 393
00278		滝・豊田製紙遺跡群 C地区	沼門市豊田町		製紙跡	田	畑内牧込跡	平安	遺灰、土師器、 銅線土器	1983年、豊田文センタ ー発掘調査	
00279		滝・豊田製紙遺跡群 H地区	沼門市豊田町		敷布地	田	畑内牧込跡	不詳			
00280	1	豊田門山 1号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳	埴耳、直刀、鉄 刀子	県指定古墳。1970年市 文書調査指定。東 方後円部、全長35m。 横穴式石室。墓石。	379, 383
	2	豊田門山 2号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳	埴耳、直刀、鉄 刀子	1983年、豊田文センタ ー発掘調査	
	3	豊田門山 3号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳		円墳。埴耳石棺。円 墳。埴耳石棺。	
	4	豊田門山 4号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	寺地・山林	台地	古墳		円墳。埴耳石棺。	
	5	豊田門山 5号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	寺地	台地	古墳	埴耳石棺、高杯・埴 耳、埴耳石棺、埴耳・埴 耳、小埴耳	組合式埴耳石棺。埴耳 石棺。埴耳石棺。	
	6	豊田門山 6号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	寺地	台地	古墳		1972年、不詳見。円 墳。横穴式石室。	
	7	豊田門山 7号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳	石棺、埴耳土師器、 埴耳土師器	横穴式石室	
	8	豊田門山 8号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	墓地	台地	古墳		円墳。埴耳石棺。横穴 式石室。	
	9	豊田門山 9号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳		横穴式石室。	
	10	豊田門山 10号墳	沼門市豊田町	マルヤマ	古墳	山林	台地	古墳			
00281		豊田門山中世墓	沼門市豊田町	マルヤマ	墓	寺地	台地	中世			265
00282		豊田観音山古墳	沼門市豊田町	観音堂	古墳	山林	台地	古墳	円形埴耳、埴耳 埴耳	県指定古墳。1970年市 文書調査指定。東 方後円部、全長35m。 横穴式石室。墓石。	250, 379
00283	1	豊田 1号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査	1307
	2	豊田 2号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査	
	3	豊田 3号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査 調査。円墳。埴耳石 室。墓石。	
	4	豊田 4号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査	
	5	豊田 5号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査 調査。円墳。埴耳石 室。墓石。	
	6	豊田 6号地下式横穴	沼門市豊田町		不詳	田	台地	不詳		1983年市教委発掘調査	
00284		豊田ところ塚古墳	沼門市豊田町		古墳	田	台地	古墳	須磨石、埴耳	1983年、市教委発掘調 査。横穴式石室。	765, 1307
00285		芝原待姫跡	沼門市豊田町	ショウカン屋敷	庭跡	田	台地	不詳			2, 5, 6, 20 896, 1094
00286		豊田二ヶ丘古墳	沼門市豊田町		古墳	田	台地	古墳	須磨石、埴耳	1983年市教委発掘調査	765, 1307
00287		豊田渡田遺跡	沼門市豊田町	ヌタ	敷布地	田・山林	平地	平安～平安	土師器、石	1983年市教委発掘調査	1428
00288		滝谷八幡社古墳	沼門市滝谷町		古墳	畑	丘陵	古墳	円墳。埴耳石	円墳。埴耳石。	
00289		滝谷八幡社遺跡	沼門市滝谷町		敷布地	田	丘陵	古墳	埴耳、埴耳、埴 耳、埴耳、埴耳	埴耳、埴耳、埴 耳、埴耳、埴耳	
00290		滝谷中世墓	沼門市滝谷町		墓	山林	丘陵	中世			
00291		滝谷テラス跡	沼門市滝谷町		製紙跡	山林	丘陵	不詳		4基以上よりなる。	
00292		滝谷遺跡	沼門市滝谷町		横穴墓	山林	丘陵	古墳			1295
00293		豊田ブドウテラス跡	沼門市豊田町	ブドウテラス	製紙跡	田	台地	不詳	埴耳		
00294		豊田遺跡	沼門市豊田町		敷布地	山林	丘陵	平安	須磨石		435
00295		豊田マツコト瓦葺跡	沼門市豊田町		敷布地	山林	丘陵斜面	奈良	埴耳瓦、埴耳瓦、 瓦、埴耳瓦、埴 耳瓦	4基以上よりなる。	1295, 1413
00296		豊田マツコト瓦葺跡	沼門市豊田町		敷布地	山林	丘陵	奈良・平安	須磨石、埴耳	須磨石、埴耳より一 部。埴耳瓦を含む。	1295
00297		豊田マツコト瓦葺テラス跡	沼門市豊田町		製紙跡	山林	丘陵斜面	不詳		3基以上よりなる。松 川川に由来。	
00298		谷内(大)1号遺跡	沼門市豊田町		製紙跡	山林	丘陵斜面	平安		南本郷1号遺跡に由来	1295
00299		谷内(大)2号遺跡	沼門市豊田町		製紙跡	山林	丘陵斜面	不詳		南本郷1号遺跡に由来	1295

第2章 調査の経緯と経過

第1節 過去の調査と成果

1978年3月、中越照次氏が能登海浜道路建設の関連工事現場から大量の土器を発見したことをきっかけとして遺跡の調査が始まった。1978～1980年の3ヶ年で延べ30,000㎡を越える調査が実施され、縄文時代前期から室町時代にかけての大規模な複合遺跡であることが確認された。特に飛鳥時代から室町時代の間は、すぐ近くに鎮座する気多神社との関係を示す様々な遺物と遺構が検出された。

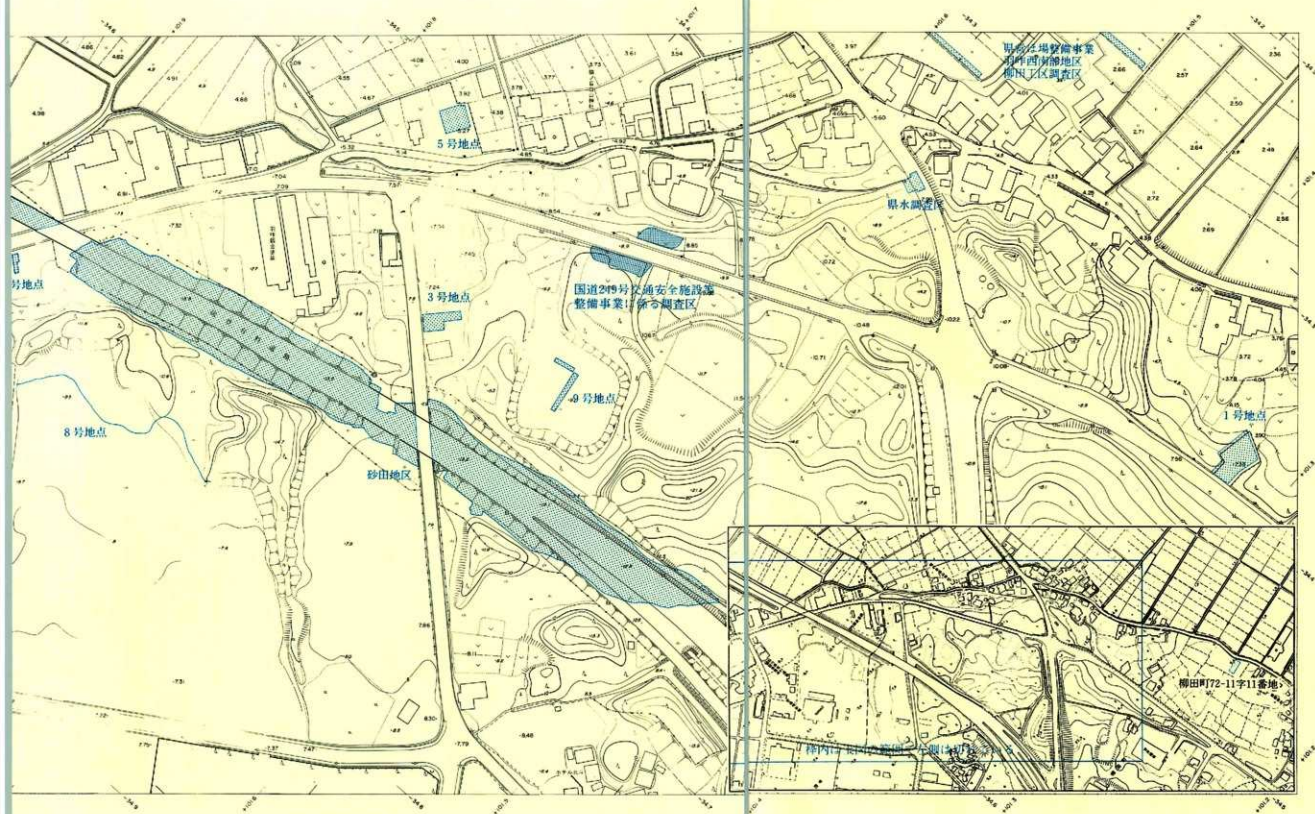
概要を見ると、7世紀前半に小規模な集落で祭祀行為が始まっており、勾玉・ガラス玉・金環などが出土している。8世紀前半では祭祀地区と呼ぶ調査区で、窪地と土塁と溝で区画し祭祀場としたものと考えられ、石組炉や多数の焼土面などが検出されている。一方、砂田地区では竪穴式建物が増え、カマドを伴う建物から素文鏡・海獣葡萄鏡・銅鈴・帯金具などが出土している。この神戸集団の竪穴式建物も8世紀後半には掘立柱建物に建て替えられている。

9世紀には、神戸集団の集落的建物群が姿を消し、2群からなる大型掘立柱建物が造営される。まず2×5間で西側に底が付く建物を中心とする北部大型建物群が配置され、周辺からは金銅製刀装具・素文鏡・三彩小壺・緑釉平瓶などの祭具と「宮厨」と墨書された土器が出土している。ついで北部建物群に代わって中央大型建物群が造立される。特に2×9間で東側中央に5間の底を持つ建物が最大で、柱穴掘り方から鎮壇に使用されたと見られる平瓶・隆平永宝などが出土している。また周辺から「司館」の墨書土器も出土し、前述の「宮厨」と共に大型建物群が神社の政庁域であった可能性を示す好資料が得られている。また中央大型建物群の南側で畑の畝溝や小鍛冶と製塩の工房跡、北部大型建物群の北側でも小鍛冶の炉跡などが検出され、周辺に生産域が広がっていたことが窺える。

10世紀初頭になり、砂丘の移動が始まり遺跡の半分以上が砂の下になってしまう。これまで展開した祭祀施設は姿を消し、土塁や溝で区画した郭や館群が造営される。これらの館群は変化しながら14世紀前半まで引き続き機能していたが、14世紀中頃から砂丘の移動が活発となり廃絶したものと考えられる。その後、郭内を畑として利用されるが再び砂丘の移動で15世紀初頭には完全に砂丘の下に埋まったものと推測される。

以上が寺家遺跡の概略であるが、これまで年次で通算すれば第12次の調査が実施され、遺跡の範囲も25haを超す広がりがあることが確認されている。最近の調査では、遺跡の東方縁辺部で邑知潟へ通じる道状遺構が検出され、潟を利用した水運で能登国府などへの交通路となっていたと考えられている。また南端の調査で、6世紀前半の竪穴式建物が発見され、小型銅鏡片・ガラス玉・管玉・白玉・製塩土器・鉾津などが出土した。本遺跡中心部で7世紀初頭に始まったとされる祭祀活動の先行集落としての様相を示し、また北方丘陵部で生産が開始された羽咋古窯跡群柳田ウノ1号窯の供給関係を示す好資料が得られている。

発見当時の調査で、古代祭祀に関する資料が多く出土し「渚の正倉院」とまで称され全国的にも



第3図 調査区位置図 (1/2,000-1/5,000)

第4表 寺家遺跡の調査経過

調査年度	調査名	調査地区名	調査面積(m ²)	調査機関	調査原因	その他
昭和53年(1978)	第1次発掘調査	新紀寺地区 太田地区 砂田地区	1,350 1,900 500	石川県教育委員会	能登海浜道第二期	緑木曾根院工事項目から大仏の土器を発見。奈良三尊、御院殿などの遺物が出土。保存工事が行われる。
昭和54年(1979)	第2次発掘調査	太田地区 砂田地区	300 1,500	石川県立埋蔵文化財センター	#	砂田地区で大仏遺物を7種出土。後の位置の変更で建物基礎を保存する。
昭和55年(1980)	第3次発掘調査	砂田地区	1,000	#	#	調査区へ面積約15,000㎡、区内の航空写真測量が行われる。
昭和56年(1981)	第4次発掘調査	砂田地区 1号地点 2号地点	26 250 220	羽咋市教育委員会	国道249号多道復旧工事 遺跡範囲確認調査	1号地点より、漆器と木造瓦型が出土。工場の存在を裏付けるものか。
昭和57年(1982)	第5次発掘調査	3号地点 4号地点 5号地点	150 80 190	#	#	
昭和58年(1983)	第6次発掘調査	6号地点 7号地点 8号地点 9号地点	6 29 325 70	#	#	
昭和59年(1984)	第7次発掘調査	53-8番地 (4号地)	460	#	宅地化に伴う調査	
昭和60年(1985)		排水調査区	100	518号2号線249号センター	排水道供給事業	第11次調査で報告
昭和61年(1986)	第8次発掘調査	24-1番地 (6号地) 53-3番地	33 52	羽咋市教育委員会	個人住宅等建設事業	
平成3年(1991)	第9次発掘調査	シカモ地区 (33番地)	120	#	公共施設建設事業	
平成4年(1992)	第10次発掘調査	53-12番地 53-1番地	72 32	#	個人住宅等建設事業	
平成5年(1993)	第11次発掘調査	石川県立埋蔵文化財センター 砂田地区	200	石川県立埋蔵文化財センター	調査区は埋蔵文化財調査区 羽咋市砂田地区	近頃遺跡出土。漆、漆器が出土。
平成8年(1996)	第12次発掘調査	砂田地区 17-11 17-11番地	100	羽咋市教育委員会	個人住宅建設事業	6 C 前年の航空写真が撮れる範囲の存在を確認。
平成9年(1997)	第13次発掘調査	砂田地区 17-11 17-11番地	500	#	一般国道249号交通安全施設等整備事業	土壌を調査。

話題となった重要遺跡で今回の調査が第13次となる。

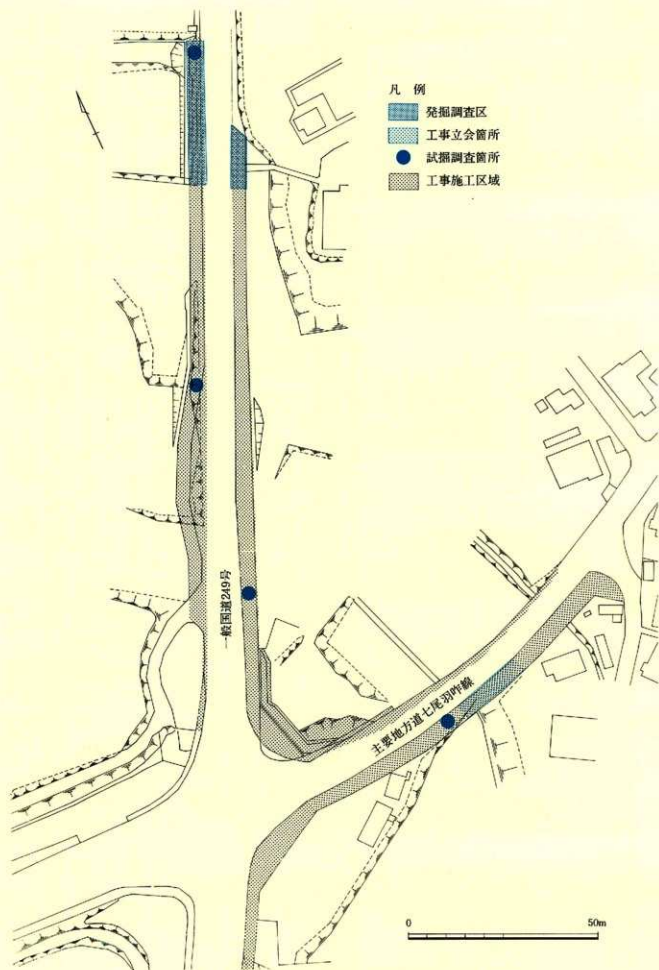
第2節 調査の経緯

石川県羽咋土木事務所（以下・県土木）から一般国道249号交通安全施設等整備工事に係る2件の発掘調査依頼の打診があったのは平成6年10月のことである。2件とは滝大塚古墳と寺家遺跡での調査で、以後は県土木、石川県立埋蔵文化財センター（以下・県埋文）と羽咋市教育委員会（以下・市教委）の三者で協議し対応することとした。翌平成7年1月、三者で協議した結果、市教委としては来年度の事業が多く、すべてに対応することは困難であり滝大塚古墳については平成7年度に実施するが、寺家遺跡については県土木と県埋文で調整することとなった。

平成8年、再び発掘調査の依頼が県土木、石川県教育委員会文化財課（以下・県文化財課）双方よりあり、本年度の事業に組み入れられないが、次年度調査ということで内諾した。

平成9年3月28日、当事業の工事立会調査の際、県土木・県文化財課・市教委の三者で本調査に係る事前協議が持たれ、市教委から発掘調査の実施についてその内容を記し、県土木に提出することで合意した。

以上の経緯で石川県との間に寺家遺跡発掘調査の委託契約を締結できたのは平成9年（1997）8月のことであった。また、発掘調査期間は平成9年8月25日から12月9日まで延べ66日間、調査面積は約500㎡である。



第4図 工事区域と発掘調査位置図 (1/5,000)

第3節 調査の経過（日誌抄）

8月25・26日

本日より現地入り。県土木、県文化財課の立会いで重機による西側調査区表土除去作業。

8月27日

発掘機材の搬入。ユニットハウス、ベルトコンベアーの設置。

8月28日

本日より作業員による発掘調査開始。黄色砂の除去。

8月29日、9月1・2日

包含層まで黄色砂の除去作業。包含層上面での写真撮影を行う。

9月3～5日

グリッド杭の設定後、包含層上面の土塁を平板測量する。小嶋・北野両氏が来跡、指導していただく。

9月9～12日

包含層の掘り下げ作業を継続する。

9月16日

台風19号の接近で、その対応をする。

9月18日

台風の影響はほとんどなく一安心。再び掘り下げ作業を行う。

9月19日

土塁内の遺構検出を行う。畝溝、ピットを検出する。

9月22日

西側調査区の遺構検出状況の写真撮影を行い、その後に遺構の掘り下げ作業。県土木と東側調査区の作業日程を打ち合わせる。

9月24日

遺構の掘り下げ作業、写真撮影を行う。

9月25・26・29・30日

平面実測図の作成。29日より東側調査区の矢板の打ち込み作業が始まる。

10月1～3日

土塁にトレンチを設定し、盛土状況を確認しながら掘り下げを行う。写真撮影も同時に行う。

10月6日

引き続き掘り下げ作業。東側調査区の表土除去を重機で行う。

10月7日

風が強く飛砂に悩まされながら調査を行う。



調査前の風景



表土除去作業



土塁調査風景



空中写真実測準備

10月8・9日

東側調査区の調査開始。西側も調査続行。

10月13～17日

東側調査区の遺構検出と写真撮影。遺構の掘り下げ作業。西側調査区では土塁のトレンチ掘り下げと断面観察を行う。

10月20・22～24・27日

東側調査区で包含層の掘り下げ作業。国道からの深さが4m近くとなり危険な状態となる。西側調査区ではトレンチの断面観察と実測図作成を行う。

10月28日

午前中、小雨の降る中を空中写真測量の準備をする。午後、測量を実施。

10月29～30日

西側調査区で土塁の掘り下げ作業。東側調査区は危険なため中央にトレンチを入れて調査することとする。

11月4・5日

土塁の掘り下げと新たに検出した遺構の掘り下げを行う。

11月6・7日

土塁の掘り下げと写真撮影を行う。

11月10～12日

土塁の掘り下げと並行して平面実測図を作成。

11月13～15日

西側調査区の包含層掘り下げと遺構検出作業。

11月19～21日

西側調査区で遺構検出状況の写真撮影。掘り下げ作業。東側で包含層の掘り下げを行う。

11月25・27・28日

遺構の掘り下げを続行し完掘する。写真撮影と断面図の作成を行う。

11月29日

西側調査区の下層を空中写真測量で行う。

12月1・3・4日

西側調査区東壁面の土層観察、写真撮影、実測図の作成を行う。東側調査区の埋め戻し作業、矢板の撤去。

12月8日

現地にて発掘成果を記者発表する。新聞4社が来訪する。

12月9日

西側調査区の埋め戻し作業。発掘機材等の撤収作業を行い、現地調査を終了する。



土塁盛土の調査



リフトセンサーで空中写真測量



埋戻し作業



発掘調査参加者

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

1. 調査区の設定

寺家遺跡の発掘調査は、先に述べたように1978年に始まり今回の調査までに19年の年月が過ぎ、これまでに調査の大小はあるが年次で第13次を数え、調査面積約18.565㎡が実施されている。今回の調査は、砂田地区にあたり、一般国道249号猫ノ目交差点より北へ約150mの地点に位置する。

1980年度（第3次調査）で設定されたグリッドは、調査区の南北を通る軸を任意に設定し、この軸を中心に120mの大グリッドを設定している。この大グリッドを、西北から1・2・3…と呼称し、この大グリッドを更に15mの中グリッドで分割し、南北方向の軸をAからIのアルファベットで、東西方向の軸を1から8の数字で呼び、この軸の交点の北西方向のグリッドを、大グリッドの数字をつけて軸の座標名で標記されている。これにそって今回の調査区を見ると、大グリッドで14にあたり、座標名で14A 4～6・14B 4・14C 4に位置する。

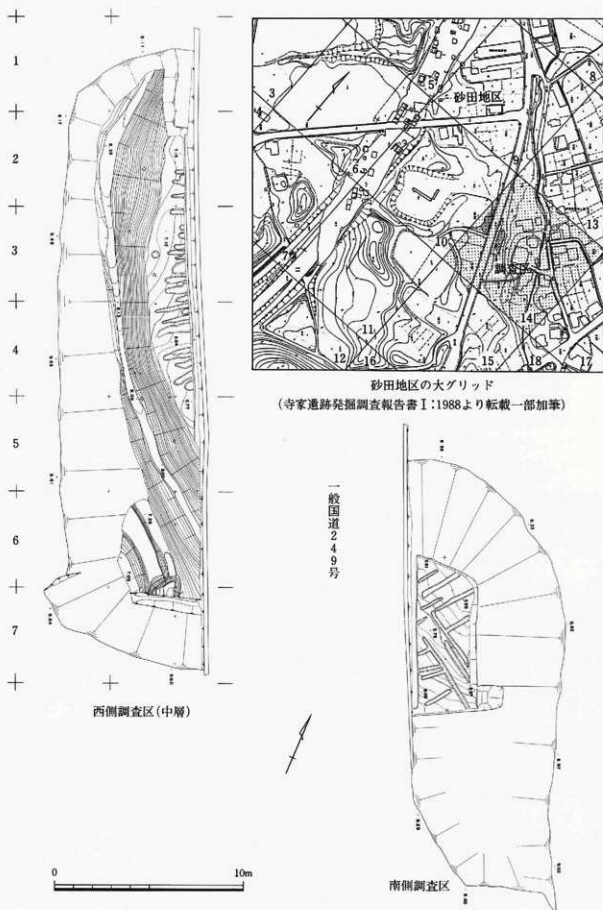
今回の調査では、便宜的に国道を境にして東側調査区と西側調査区に分けて呼んでいる。西側調査区では、国道に沿って任意の軸を設定し、この軸を5mで区切って北より1～7区に区画して遺構や遺物の記録を行った。東側調査区は範囲も狭いことから一括して遺物の取り上げを行った。

2. 包含層の概要

寺家遺跡のほとんどは、内列砂丘の下に埋まって存在しているがその上に深いところで約10m、浅い場所でも1m前後の黄色砂が堆積している。寺家遺跡発掘調査報告Ⅰによると、砂田地区はN区とS区に分けられているが、S区は標高7～8mの旧砂丘の尾根筋の上に位置している。尾根筋の幅は、約45mを計る。ここでは厚さ40cm前後の黒褐色系の包含層が全面に検出され、遺構面は土層の上面・下層の上面・基礎砂層の上面の計3面で検出されている。標高約7mの尾根筋は海側大グリッド11の南北（11A 5）あたりで約30度の傾斜で標高5.5mの底に達し、黒褐色系の包含層がかなり厚く堆積し、海側とはきわだった対象を呈している。この尾根筋は北西から南東に伸びている模様である。また市道が通っている中央では、S区の尾根から小さく東に派生する尾根を検出している。この尾根から南北に傾斜する斜面は比較的緩い角度となっている。

N区ではS区から伸びて来た尾根が6H 7あたりで、海側を通り、N区はこの尾根の東斜面に該当する。この斜面は標高4.5mまで下がり、再び標高6.5mの高まりがある尾根筋が続く。またN区北側では標高が5m前後でその北端より約30cm高くなっており、祭祀地区との間に東西方向に伸びる低い尾根が伸びていると考えられる。

この結果から、砂田地区のある旧砂丘では標高8m前後の北西に伸びる尾根を主脈として、ここから派生する小さな尾根と、更に主脈の尾根と平行する標高6m前後の低い尾根が形成する起伏に富んだ地形の上に遺跡が形成されていたことがわかった。また、旧砂丘で検出した地形は、現在の



第5図 調査区全体図・区割図 (1/200)

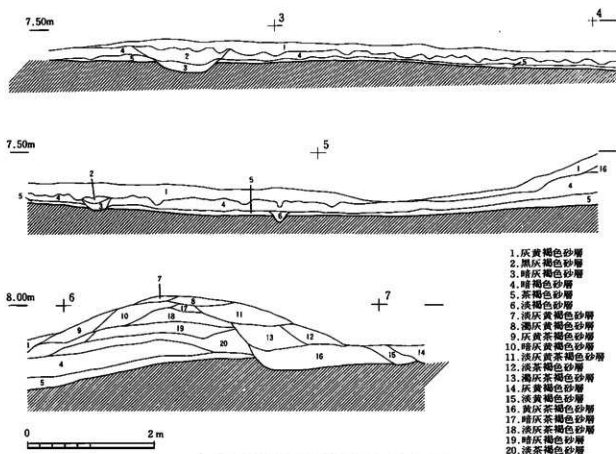
砂丘の地形と相関関係があまり認められていなかったことも明らかになったと報告されている。^{註1}

今回の調査区も例外なく黄色砂に覆われていたが、現状は砂丘の砂が採取され、標高は東側調査区で9 m前後、西側調査区で10.5 m前後の畑地となっている。

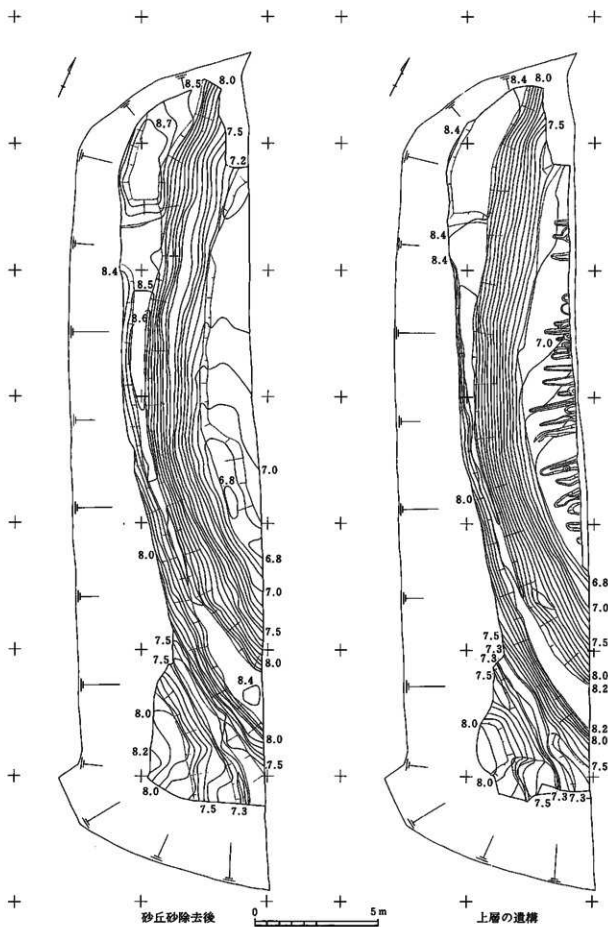
調査は一般国道249号側を矢板で補強し、安全を確保した。包含層は東側調査区で地表下約3 m、標高約6 mに黒褐色の包含層が検出され、西側調査区では地表下約2 m、標高約8 mに土塁の頂上が検出された。東側調査区では南側で標高6.16 m、北側で標高5.62 mと、南から北側へと緩やかに傾斜している。また西側調査区では土塁の内側と考えられる東側と土塁の外側と見られる6区西側とでは1 m前後の高低差があり、内側で標高7.03 m、外側で8.01 mを計る。調査区は、砂丘の内陸部端、低湿地帯との境界に近く、前述の北西に伸びる主脈の尾根と平行する尾根状あるいは東側傾斜地に位置するものと考えられる。

東側調査区で包含層は南側で約0.4 mを測り、北側で0.8 mと傾斜に向かって厚く堆積していた。西側調査区では、土塁の内側で包含層の厚さは0.4 m前後である。包含層の堆積状況は上層に10～20 cmの厚さで灰黄褐色砂層が堆積するが、これは第1層と呼ばれている層である。第2層が暗褐色砂層で下層が茶褐色砂層の第2層下層にあたるものと考えられる。遺構検出は、第2層上面と第2層下層上面、基盤砂層の上面の3面で検出にあたった。

註1『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』1986石川県立埋蔵文化財センター



第6図 西側調査区東壁面土層断面図 (1/60)



第7図 西側調査区土壁平面図 (1/ 150)

第2節 遺 構

1. 第1層の遺構

黄灰色の砂丘砂を除去していくと、若干粘質をおびた黄灰褐色の砂層が現れた。前述のとおり第1層は20cm前後の厚さで堆積しているが、これは第3次の報告と同じで第2層の土塁で区画された郭の上に堆積した包含層である。

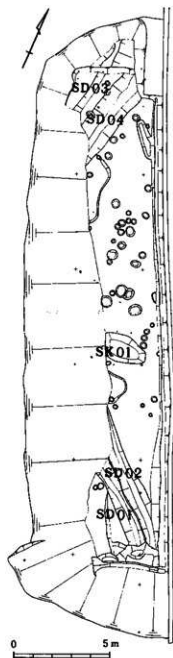
この層では東側調査区でN—27°—Eに走向する溝3条とその溝の南先端で接するように伸びるN—60°—Wに軸をとる溝1条が検出された。南北方向の溝は、幅40cm前後・深さ10cm前後の規模で約2mの間隔で並行して走っている。また東西に走る溝もほぼ同じ規模の溝である。この溝の性格についても報告されている畑の畝に伴った溝条の遺構の可能性が想定されているものである。緩斜面に合わせた土地利用がなされている。

2. 土 塁

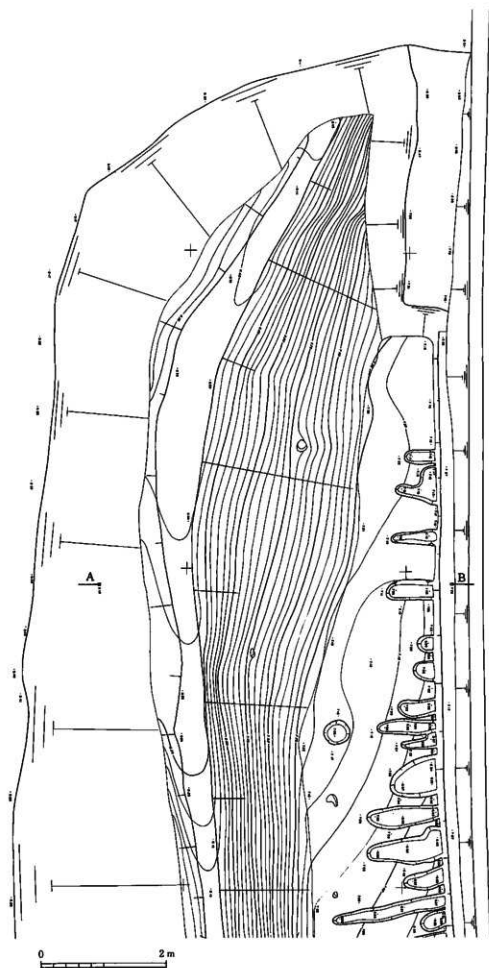
調査開始の表土除去段階で西側調査区全域で現れてきたのが土塁である。調査区の長軸とほぼ同方向にやや弧状を描き伸び、N—25°—Wの方向にほぼ向っている。部分掘で西側の基底部の全形は窺い知れないが、5・6区で推定すると、土塁の基底部の幅は370cm前後となる。また土塁に伴った溝が郭（土塁の内）の外側で検出された。内側では、土塁基底部に若干の凹みが窺われたが、溝は検出されなかった。土塁上に平坦面をもっているが幅が20～190cmを測り、南側3～5区にかけては幅が狭く痩せ尾根状となり、北側の3区で徐々に幅が広がり2区で150cm前後の幅の平坦面となっている。また、2区と3区の境界に土塁に直交して幅2.5m、深さ約20cmの規模で凹んでいた。土塁に3箇所の特レンチを設定し、盛土状況を観察した。

ABセクション

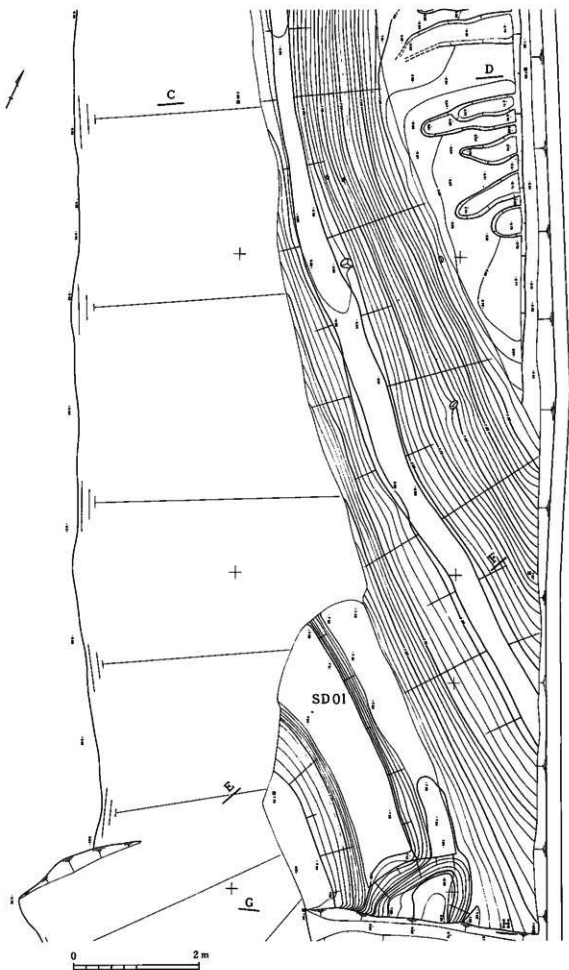
2区と3区の境界に設定した。土塁の盛土は暗褐色の基盤砂層である第2層上に築いているものと考えられる。高さは基盤からの高さが92cmを測り、郭内との比高は約120cmである。土塁の盛土は、灰黄褐色の砂層が上部に覆う状態で堆積し、内側に灰茶褐色の砂層が堆積していた。この地点での土塁上平坦面の幅は182cmを測る。また、土塁盛土の真下でSD04を検出している。



第8図 西側調査区下層全体図 (1/200)



第9图 西侧调查区平面图1 (1/60)



第10図 西側調査区平面図2 (1/60)

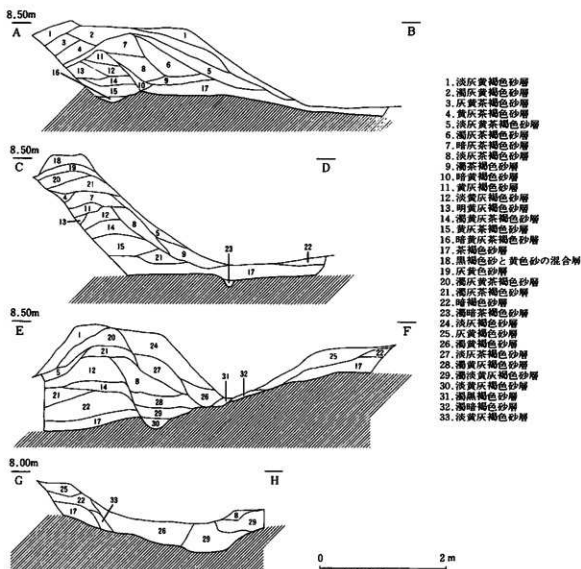
CDセクション

4区中央に設定したトレンチである。土塁上の平坦面は幅44cmと狭い位置にあたる。基盤砂層は前セクションと同じ第2層で基盤からの高さ124cmを測り、郭内との比高は173cmとなっていた。盛土は最上部に黒褐色と黄色砂の混合した層が厚さ約20cm堆積し、その下に灰黄褐色と灰茶褐色の砂層が堆積していた。

EFセクション

6区に設定したトレンチで郭外側の溝（SD01）と土塁の関係が観察できる唯一のセクションである。土塁の基盤は暗褐色砂の第2層上に築かれている。基盤から105cmの高さまで盛土されていた。上端は135cmの平坦面があり、盛土は他の場所と同じ灰黄褐色と灰茶褐色の砂層であった。SD01は、土塁上端からの幅で242cm、深さ80cmの規模であった。

このセクションで土塁が改修されていることが確認された。土塁外側の基底部より内へ約40cm入った位置に幅105cm、深さ52cmの規模の溝（SD02）が検出され、改修前の土塁に伴う溝で土塁の規模は高さ55cm、幅は推定で250cm前後になるものと考えられる。この結果、改修前の土塁は灰茶褐色系の砂で盛られ、改修後は規模も大きくなり、灰黄褐色系の砂で盛土されたと考えられる。



第11図 土層断面図 (1/60)

3. 第2層の遺構

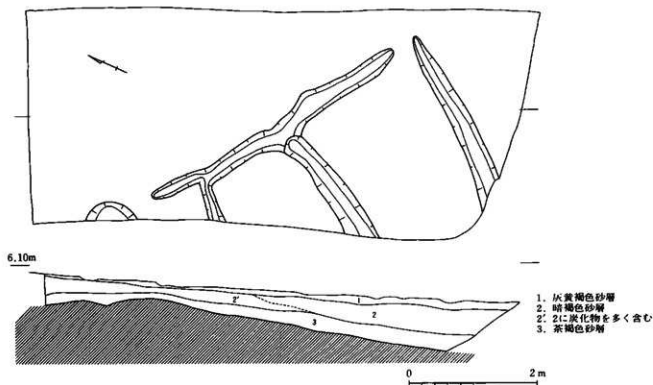
第2層では、前述の土塁と溝、ピットを検出した。郭の内側で畝溝と考えられる不整形で浅い溝を西側調査区で約20条、東側調査区で13条が検出された。覆土は第1層の灰黄褐色砂で埋っていた。畝溝の走向は西側調査区でN—55°—E、東側調査区でN—45°—Eと東側の畝溝が若干北に振っていた。この溝に直交する溝が3条検出している。溝の規模は幅65~20cmと一定していない。深さは2~8cmと浅く、溝底は一定していなかった。3区で検出されたピットは略円形を呈し、径約40cm、深さ12cmを測る。この他に溝としたものの中にピット状になるものも含まれる。

また土塁に伴うSD01は、土塁上端からの幅で226~245cm、土塁外の平坦面からの深さが26~30cmを測る。このSD01の西側郭外は、段状に平坦面となっていた。規模は85~110cmの幅でSD01に沿ってN—48°—Wの方向に走っていた。南側平坦面と段差は約10cmを測る。SD01の南端で土坑状の落ち込みを検出している。規模は調査区外に広がり不明である。GHセクションで観るかぎりSD01を切って掘り込まれている。覆土は暗黄灰色砂層である。

4. 第2層下層の遺構

EFセクションで確認された改修前の土塁と溝（SD02）である。また、基盤砂層で検出されたSD03・SD04は、2区以北で第2層下層が土塁の改修や郭内の整地などにより削平されていたためと考えられ、第2層下層の遺構として取り扱った。

SD02は改修前の土塁に伴う溝で5~6区にかけて、N—50°—Wの東西方向の溝である。検出は調査者の力量不足から、土塁を撤去してから行った。規模は幅82~105cm、深さ20cm前後で西側へと深くなっていた。覆土は茶褐色砂層である。



第12図 東側上面遺構平面図・土層断面図 (1/60)

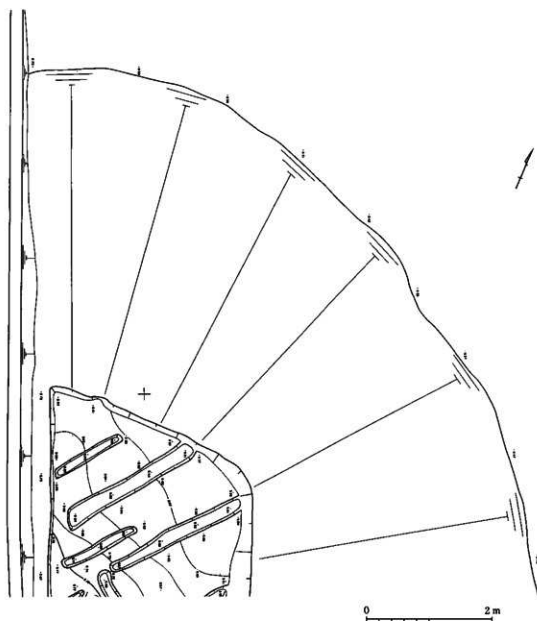
SD03はSD04と並行してN-13°Eの南北方向に走る溝である。規模は検出面で幅80~100cm、深さ30cm前後を測る。覆土は灰茶褐色砂で、IJ・KLセクションの観察からSD04を切って掘られた溝でSD02と同様の機能を有する溝と考えられる。

SD04はSD03と同様にN-13°Eの南北方向の溝である。SD03に先行する溝で幅152~165cm、深さ39~46cmを測る。覆土は灰茶褐色砂である。

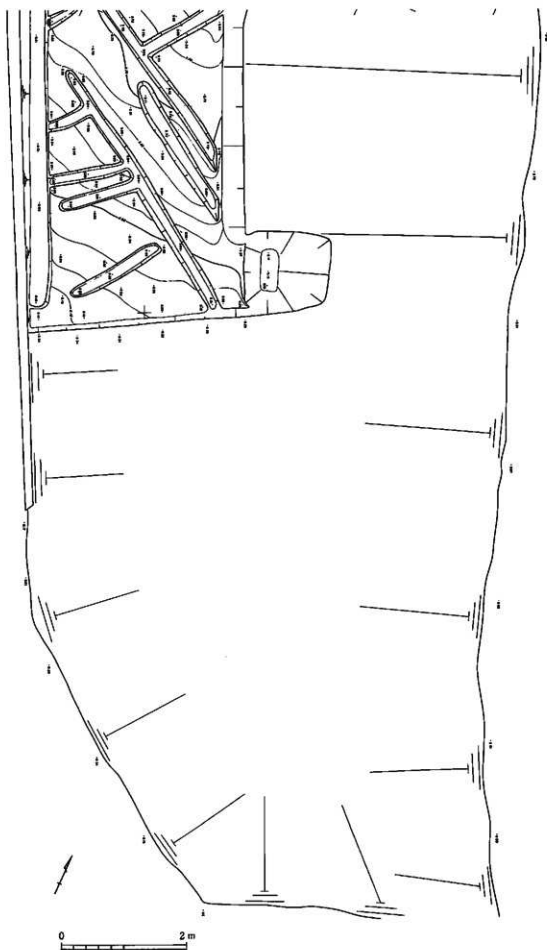
5. 基盤砂層の遺構

灰黄色の基盤砂層で検出した遺構である。土坑1基(SK01)、ピット46個、溝1条、性格不明の落ち込みが検出された。

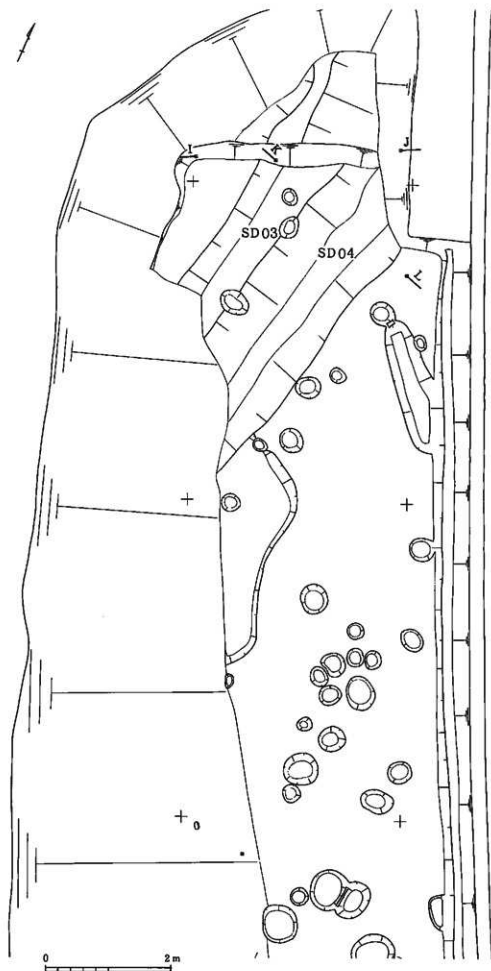
SK01は4区に位置する。平面形は歪な楕円形を呈するものとみられる。西側上端が調査区外になるが規模は上端で230×145cm、深さ73cmを測る。覆土は灰褐色砂である。



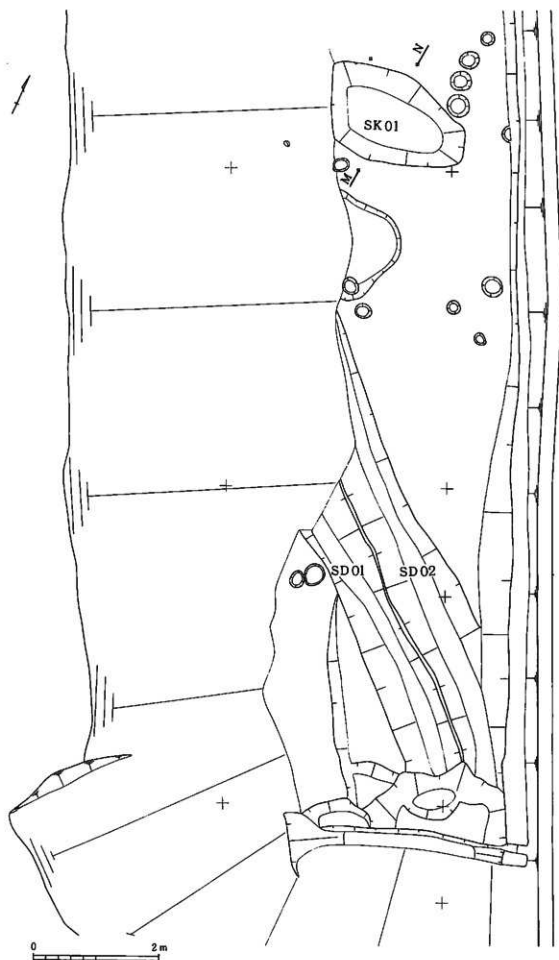
第13図 東側調査区平面図1 (1/60)



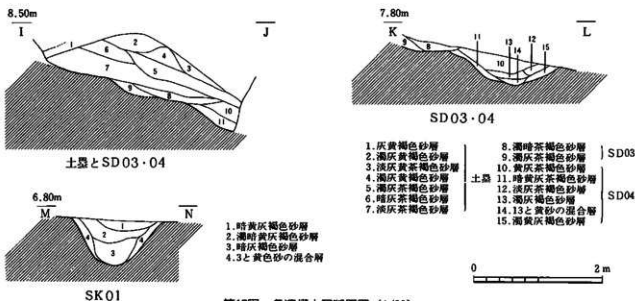
第14図 東側調査区平面図2 (1/60)



第15图 西侧调查区下層断面图1 (1/60)



第16図 西侧調査区下層断面図2 (1/60)



第17図 各遺構土層断面図 (1/60)

ビットは多数検出し、柱穴と考えられるものもあるが調査区が狭いため建物の検出には到らなかった。平面形が円形を呈するものが多く、直径20～60cm前後、深さ10～30cm前後である。遺物も土器の細片が少量出土した程度である。

溝は2区に位置し、N-42°-Wの方向に走る。幅60cm、深さ24cmを測る。この他に土坑状の落ち込みが2・3区と5区で検出された。

第3節 遺物

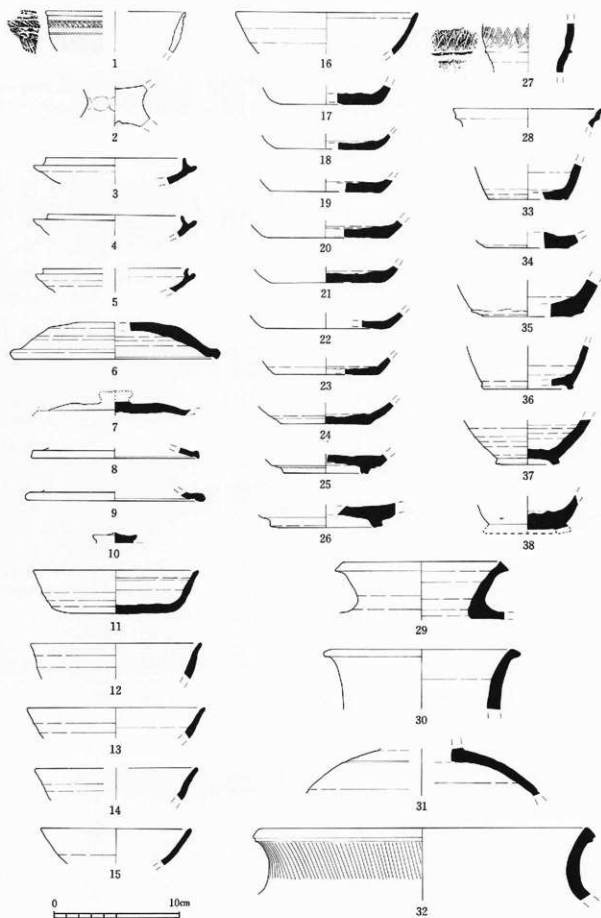
今回の調査で出土した遺物は、土壘の盛土からのものが大半を占めている。器種別に見ると弥生土器、須恵器、土師器、青磁、瀬戸・美濃系陶器、珠洲焼、鉄製品、鉄滓等と様々な遺物が出土した。土師器の中には古式土師器や中世土師器も含まれていると思われるが細片が多く分類することができなかった。また、中世の遺物については小片で図化できなかった。以下、図化した遺物を中心に若干の説明を加えたい。

弥生土器、その他

1は小型の鉢の口縁部である。口縁端部はやや外反し、先細となる。外面は斜方向、内面が横方向に条痕文が施され、口縁外面に4条の沈線が巡っている。胎土には1mm前後の砂粒が一定量含む。内外面とも赤彩が施される。時期は柴山出村式に比定されるものと思われる。2は東区より出土した脚部である。ナデと指頭によるオサエで調整されている。1mm前後の砂粒を多く含み、焼成は良い。高坏や鉢などの脚と思われる。

須恵器

128点が出土した。3～4点は坏身である。受部の立ち上がりはいずれも短く、1は直線に2は内傾し3は外反ぎみに立ち上がる。内外面は横ナデ調整で胎土は1mm前後の砂粒が少し含まれる。焼成は良好で1、2には受部に降灰が及んでいる。寺家遺跡の画期でいえばI1期に比定される。



第18図 出土遺物 1 (1/3)

6～10は坏蓋である。6は口径16.8cmを測り、口縁部は屈曲して丸くおさめる。内外面とも横ナデ調整され、天井部はヘラ切り後にナデ回している。淡灰色を呈し、胎土は1～2mmの砂粒を少し含み、焼成は良好である。7はつまみ部と口縁が欠損するもので、外面は浅橙灰色を呈し焼成がやや不良なものである。6・7には扁平なつまみが付くものと思われる。8の口縁端部は屈曲して垂下し、9は屈曲して丸くおさめる。胎土は8が緻密であるが9は砂粒を多く含む。

11は口径10.0cmの無台の坏である。口縁部は直線的に伸びて端部で微妙に外反しておさまる。内外面が横ナデ調整され、底部はヘラ切り後にヘラ先で定方向にナデつけている。淡灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。12、13も口縁端部が外反しておさまるもので、胎土は12が砂粒が多く、13は良い。焼成は13がやや不良である。14は口縁が外反ぎみにおさまるものである。15、16は口径がそれぞれ12.0cm、14.6cmを測るもので口縁が内湾ぎみに立ち上がり端部が丸くおさまる。15は灰色、16が淡灰色を呈し、胎土と焼成は良好である。

17～24は無台坏の底部破片である。内外面は横ナデ調整され、底部はヘラ切りである。切り離しの後の調整は、粗雑なナデのものが多い。17は器壁が厚く、底部から体部へやや丸く立ち上がる。器壁が薄いもの(12、43、48)、厚いもの(13、57、15)がある。24は底部の器壁が厚く、斜方向に伸びる体部で器壁が薄くなる。17、20は乳白色を呈し、焼成不良である。18、21は浅橙灰色を呈し、芯に酸化層が残っている。

25、26は有台坏の底部破片で、高台は底部のやや内側に貼り付けられナデ調整される。25は逆台形状の高台で、26は外方に踏ん張るものである。焼成、胎土は良好である。

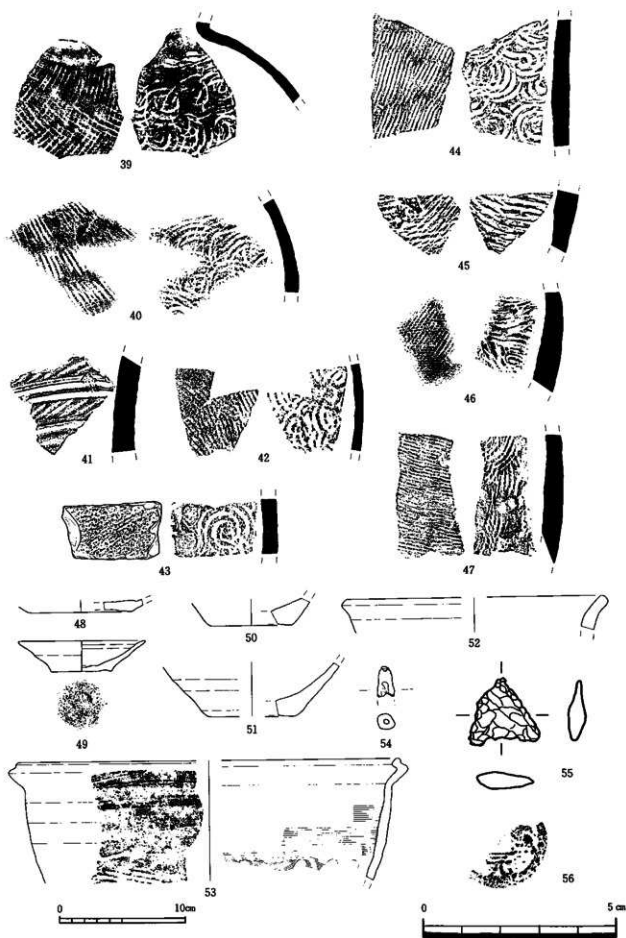
27は当初、甕の頸部と思ったが高坏の体部片で実測図は逆転し開く。内外面が横ナデ調整され、外面に段を有し、その下に波状文が巡る。外面は降灰で黒灰色の光沢を持つ。胎土は緻密で焼成も良い。古墳時代の所産である。

28～30は瓶の口縁部破片である。28は口径11.6cmで口縁端部が屈曲して外反する。内面は降灰軸で緑色を呈す。29、30は外方に開く口縁で端部で屈曲して面を持つものである。内外面は横ナデ調整され、29の体部内面はタタキである。それぞれ外面は降灰があり、30は軸が垂れている。31は瓶の肩部で2条の沈線が巡る。焼成・胎土は良い。

32は甕の口縁部である。口径25.6cmの小型のもので外反して伸びる口縁で端部の外方に面を持たせ1条の凹線が入る。口頸部外面にはカキ目状の調整が斜方向に入り、その後に横ナデ調整されている。焼成は良い。

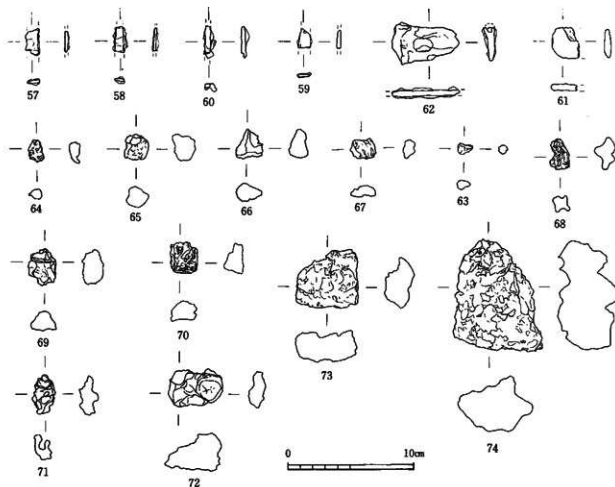
33～38は瓶類の底部破片である。33は小型のもので調整、胎土、焼成とも良い。33、34は底部の調整は粗雑である。36～38は高台が付くものである。体部真下に付き、やや外方に踏ん張る高台である。胎土は砂粒を多く含むものが多く、焼成は良好である。また33、35、37、38には内底に降灰が見られる。

39～47は甕の体部や頸部の破片である。外面は並行タタキ、内面は同心円状タタキのものがほとんどで、タタキ目の細いもの、粗いものがある。41は頸部で外面はタタキの後にナデ調整がされ、3状の凹線が施される。43は甕の体部破片であるが四方を打ち欠いて割れ口を比較的丸くしている。47も同様なものと思われる。



第19図 出土遺物2 (1/3・1/1)

(1/1)



第20図 出土遺物3 (1/3)

土師器

48は埴または皿の底部破片で底部は糸切りである。内面には指頭によるオサエ痕が残り調整は粗雑である。49は外方に直線的に伸び、端部でやや外反する皿である。内外面は横ナデ調整され、器壁を薄く仕上げている。底部の切り離しは回転糸切りである。乳橙色を呈し焼成は良い。

50～53は甕と埴である。50、51は底部破片で黄橙色を呈する。52は口縁部で内外面がナデ調整され外面に煤が付着している。53は大型の埴で、内湾ぎみの体部で口縁で外屈して内方に屈曲して、端部に面を持たせおさまる。外面体部下半をタタキ調整し、上半は横ナデ調整する。内面は横ナデとカキ目調整である。乳橙色を呈し、外面には煤が付着する。この他に内面に黒色処理を施したものも出土したが細片で図示できなかった。

その他の遺物

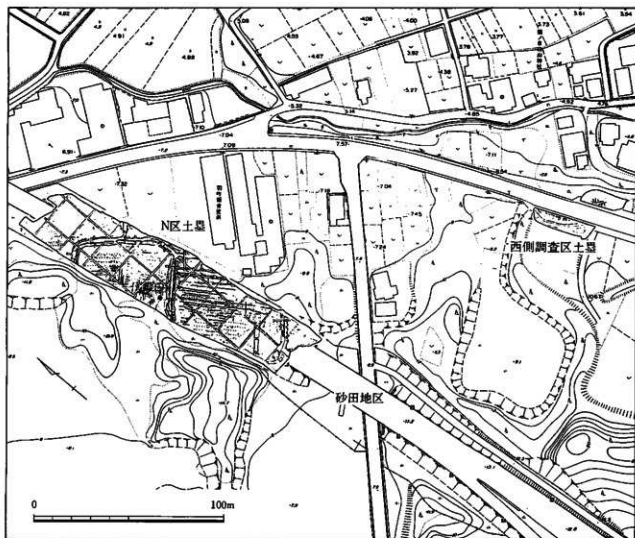
54は縁に丸みを持つ円柱形の土鍾で半分以上を欠損する。55は打製の石鏃で石質は白色凝灰岩と思われる。56は銅銭で「□口元□」で銭貨名は不明である。57～74は鉄製品および鉄滓である。57～59は刀子、60が釘である。

この他に製塩土器や軽石、また土塁の盛土上から20～30cm大の角礫が出土した。

第4章 おわりに

寺家遺跡は、羽咋市寺家町から同柳田町にかけて延長約1.2km、面積約25haの広がりがあり、羽咋砂丘の内陸部に営まれた縄文時代から室町時代までの大規模な複合遺跡であることは前述したとおりである。今回の調査区は遺跡中心部の東側、中央大型建物群より東方へ約120mに位置する。

検出された遺構は、土塁・溝状遺構・土坑・ピット・不明の落ち込みである。遺物では今回の調査で最古の土器として、弥生時代の柴山出村式土器に比定される鉢が出土したが遺構の確認はできなかった。本遺跡の東方縁辺部にあたる第11次調査（1993年）^{註1}で同時期に比定される土器が出土していて、同地区を含む遺跡東側には弥生時代前期の集落跡が存在するものと想定される。その他の出土遺物の大半は本遺跡の中心時期を示す須恵器と土師器である。しかし、包含層や土塁の盛土から出土したものがほとんどで遺構の所属時期を特定するには到らなかった。そこでこれら検出資料をこれまで詳細に報告されている小嶋芳孝氏の「寺家遺跡の面期」^{註2}に従って今回の調査区の位



第21図 砂田地区N区の土塁との位置関係図（1/2,000）

置付けを若干考えておわりとしたい。

今回の調査で包含層は第2層下層までが検出されたが、これは土塁の構築と郭内の整地で第4層以下が削平されたことによるものと思われる。遺物ではステージ1のⅠ期に属するものも含まれ、砂丘末端で小集落が点在して営まれる7世紀前半から、祭祀に関する遺構が多くなるステージ2、竪穴式建物から掘立柱建物に変わるステージ3、集落的な建物群がみられなくなり、大型の掘立柱建物群が造営され政庁域が設定され、周辺に生産域が設けられるステージ4の9世紀中頃までは、遺物が散在する程度で遺構の確認はできなかった。

ステージ5では、砂丘の内陸への進行により遺跡の半分以上が砂丘の下に埋まり、これまでの祭祀施設や大型建物群は姿を消し、土塁と溝で区画した郭に館群が造営される時期である。1・2区で検出されたSD04を同時期の溝と考えている。

13世紀から14世紀前半に入るステージ6が今回の調査で検出された土塁の時期に当たるものと考えられる。この時期は一辺50m前後の方形郭群が、幾つも連接して造営されていて、郭内には井戸を伴う館的な施設や宗教的施設の石塚が検出されている。土塁や溝の重複から、少なくとも2回の郭の改造と建物群の建替えがあった事が分かっているが、今回の調査でもSD02とSD03に伴う土塁から、SD01に伴う土塁へと改修されていることが確認できた。また、1985年に実施された調査^{注3}でも当該ステージの土塁・溝が検出され、方形郭群がかなり広範囲に造営されていることが分かる。

ステージ7は、14世紀中葉で建物群の機能が廃絶し、土塁内が畑となったものと思われる最終段階の時期である。本区域も同様に多数の畝溝を検出している。再び砂丘の移動が徐々に活発となり、砂丘砂で覆われてしまう。

以上、簡単ではあるが今回の調査結果を報告しておわりとしたい。なお、現地調査から本書作成に到るまで、度々小嶋芳孝氏に御教示、御指導を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註

1. 本多秀生『寺家遺跡』1997 石川県立埋蔵文化財センター
2. 小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』『XXXIX 寺家遺跡の調査』1988 石川県立埋蔵文化財センター
3. 橋本英道『寺家遺跡』『付録 寺家遺跡昭和60(1985)年度発掘調査報告』1997 石川県立埋蔵文化財センター

参考・引用文献

- 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』1986 石川県立埋蔵文化財センター
 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』1988 石川県立埋蔵文化財センター
 『八田中遺跡』1988 石川県立埋蔵文化財センター
 『寺家遺跡第8次調査報告書』1989 羽咋市教育委員会
 小嶋芳孝「寺家遺跡」『季刊 自然と文化 特集 中世居館』1990 財団法人 観光資源保護財団

寺家遺跡出土遺物観察表

第14次発掘調査 (1997)

凡 例

挿図番号 挿図・写真図版・本文中の遺物番号で通し番号とした。

調 整 主として各部位における断面内外の調整手法を標記した。なお、同じ部位に複数の調整が観察される場合は、一で表記しその順序を示した。

胎 土 海綿骨片、砂粒について、その大きさと量を裸眼とスコープ(50×)で観察した。
大きさは2mm以上をし、1～2mmをM、1mm以下をSとし、量は、全体を主観的に適有量と思われるものを基準(3)に、5：非常に多い、4：多い2：少ない、1：非常に少ないと表記した。

また、断面とは須恵器にのみ行ったもので、酸化焙焼成によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、還元焙焼成によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層をⅠ類、内外表面のみ還元層で、内面は全面的に酸化層が残るものをⅡ類還元層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをⅢ類、内外表面から芯まで完全に還元層のものをⅣ類、その他変則的な色層をなすものをⅤ類として分類・表記した。引用文献：安里進「須恵器の断面色層と六世紀の焼成技術」『考古学研究』

現 存 量 口縁部の残存率を24分割で示した。()内の数値は底部の残存を示す。

計 測 地 A：高台径および杯蓋のつまみ部径、B：底径、D：口径、E：杯蓋の口縁部高、G：有台杯の高台高および杯蓋のつまみ部高、H：器高。

遺・出地点 基本的に出土遺構名を記入し、その他のものはグリッド地点を示している。

備 考 記号、墨痕などその他の観察事項を記入した。

第5表 出土遺物観察表(1)

発掘 番号	出土地点	器種	器形	調 整	胎 土				計 測 値 (cm)						備 考
					海綿 質片	砂S 粒M L	断面	現存厚 I/24)	A	B	D	E	G	H	
1	西3区 包・土器	赤生土器	鉢	内外面条痕	3	M3		1							口縁4条の沈線 内外面赤彩
2	東区	土師器	脚 部	ナデ・指オサエ	1	S4									
3	西5区 包	須恵器	坏 身	内外面ナデ		S2	Ⅲ	6			11.0				受部径13.0cm. 受部高0.7cm
4	西3区 土器	"	"	"		S2	Ⅲ	4			10.6				受部径13.0cm. 受部高0.7cm
5	西4区 土器	"	"	"		S2	Ⅲ	1							受部高0.6cm
6	西4区 土器	"	坏 蓋	"	3	M2	Ⅲ	6			16.8	2.8			
7	西5・6区 SD02	"	"	"		L2	Ⅱ								
8	西3区 包	"	"	"		S1	Ⅲ	3			13.4				
9	東区	"	"	"		S4	Ⅲ	2			14.4				
10	西2区 土器	"	坏 蓋 つまみ		2	S3	Ⅲ		3.4				0.8		外面降灰
11	西4区 包	"	坏	内外面ナデ 底部へラ切り後ナデ		S2	Ⅲ	5		10.0	13.0			3.4	
12	"	"	"	内外面ナデ	2	L2	Ⅲ	3			13.6				
13	"	"	"	"	2	S2	Ⅱ	3			14.2				
14	西5区 包	"	"	"		M3	Ⅲ	2							
15	西5・6区 SD02	"	"	"		M1	Ⅲ	3			12.0				
16	東区	"	"	"		M2	Ⅲ	2			14.6				
17	西5区 土器	"	"	底部へラ切り後ナデ		M2	I			9.0					
18	西3・4区 土器	"	"	"	2	S2	Ⅱ			8.0					
19	西4区 土器	"	"	底部へラ切り		M2	Ⅲ			8.8					
20	西5区 包	"	"	"		S3	I			10.0					
21	西3区 土器	"	"	底部へラ切り後ナデ		L1	Ⅱ			8.8					
22	西5・6区 SD02	"	"			S2	Ⅲ			10.0					
23	西6区 包	"	"	"		M2	Ⅲ			8.4					
24	西4区 土器	"	"	"		S2	Ⅲ			7.0					
25	西5区 土器	"	有台坏	内外面ナデ 底部へラ切り	3	M2	Ⅱ		6.8				0.5		
26	西5・6区 SD02	"	"	"	2	M2	Ⅲ		9.0				0.5		
27	西7区 SK02	"	高坏?	内外面ナデ	2	M1	Ⅲ								波状文
28	西5区 包	"	順	"		S3	Ⅲ	4			11.5				内面降灰輪
29	西4・6区 土器	"	"	内外面ナデ 体部内面タタキ		M3	Ⅲ	3			12.4				降 灰
30	西2区 土器	"	"	内外面ナデ		M3	Ⅲ	3			15.6				"
31	西5・6区 SD02	"	"	"		S2	Ⅲ								体部に沈線2条
32	西2・3区 土器	"	壁	内外面ナデ 外部頭部斜方向外目		S3	Ⅱ	3			25.6				降 灰
33	西6区 包	"	瓶・底部	内外面ナデ		S2	Ⅲ			6.2					
34	西4区 土器	"	"							6.2					

第6表 出土遺物観察表(2)

神田 番号	出土地点	器種	器形	調 整	胎 土			現存度 (/24)	計 測 値 (cm)						備 考
					海綿 骨片	砂S 粒M L	断面		A	B	D	E	G	H	
35	西5・6区 SD02	須恵器	瓶・底部	内外面ナデ	2	M3	Ⅲ		7.0						内底に降灰
36	西5区 包	"	"	"	2	M2	Ⅲ		7.2				0.3		
37	西4区 土層	"	"	"		L1	Ⅲ		5.0				0.4		内底に降灰
38	"	"	"	"		L2	Ⅲ								"
39	西4区 包	"	甕・体部	内面タタキ 外面タタキ→ナデ→カキ目	2	M4	Ⅲ								
40	西5区 土層	"	"	内面タタキ 外面タタキ→カキ目		S2	Ⅲ								降灰
41	西3区 土層	"	甕・頸部	内面ナデ 外面タタキ→ナデ		S2	Ⅲ								凹線3条
42	西5・6区 SD02	"	甕・体部	内外面タタキ		M2	Ⅲ								降灰
43	西6区 トレンチ	"	"	"	3	M3	Ⅲ								再利用？
44	西5・6区 SD02	"	"	内面タタキ 外面タタキ→ナデ		L2	Ⅲ								
45	西3区 土層	"	"	"		M3	Ⅲ								
46	西2区 包	"	"	"		M2	Ⅲ								
47	西5区 SD02	"	"	内外面タタキ	3	S3	Ⅱ								
48	西5区 包	土師器	底 部	ナデ 底部へう切り後ナデ		S2			8.0						
49	西3区 土層	"	Ⅲ	内外面ナデ 底部糸切り		S1		8	5.0		10.0			2.4	
50	西6区 土層	"	底 部	内外面ナデ	2	M2			6.6						
51	西6区 トレンチ	"	"	"	3	M3									
52	西4区 土層	"	甕	"		M3		1							外部僅付着
53	西5区 土層	"	罎	内面ナデとカキ目 外面ナデとタタキ		M2		3							"
54	西6区 トレンチ	土 製	土 師												
55	西5区 土層	石 器	石 鏝												縦1.6cm、横1.8cm
56	"	貨幣	銅 銭												「□元□口」

神田 番号	出土地点	資料名	全長	幅	厚さ	重量(g)
57	西5区 包	刀 子	2.1	0.8	0.2	1.2
58	西3区 トレンチ	"	2.1	0.9	0.2	1.3
59	東 区 包	"	1.6	1.0	0.2	0.7
60	西 区 SD04	釘	2.2	0.4	0.3	1.1
61	西7区 土層	不明品	2.3	2.0	0.5	4.5
62	西2区 土層	"	5.2	2.7	0.6	18.5
63	東 区 包	鉄 滓	1.2	0.8	0.7	0.7
64	西2区 土層	"	1.8	1.2	0.8	1.6
66	東 区 包	"	2.0	1.5	0.9	3.8

神田 番号	出土地点	資料名	全長	幅	厚さ	重量(g)
66	西4区 トレンチ	鉄 滓	2.3	1.5	1.5	4.6
67	西3区 土層	"	2.4	2.0	1.5	12.3
68	西4区 包	"	2.0	1.8	1.6	7.0
69	西2区 土層	"	2.2	2.1	1.5	8.9
70	西3区 土層	"	3.0	2.2	1.6	11.2
71	東 区 包	"	3.0	1.7	1.4	7.8
72	"	"	4.3	3.0	2.8	36.2
73	西4区 土層	"	4.8	4.5	2.4	77.4
74	"	"	8.5	7.0	4.5	346.4

写真図版

寺家遺跡の写真記録資料

図版 1～13

寺家遺跡第14次発掘調査における現地での発掘記録

図版14～16

寺家遺跡第14次発掘調査における出土遺物の記録写真



調査区俯瞰（南東より）



1. 調査区俯瞰（北西より）



2. 調査区全域空中写真



1. 表土除去後の土壁（南より）



2. 表土除去後の土壁（北より）



1. 上層の遺構検出状況



5. 畝溝とPit完掘（南西より）



2. 畝溝とPit検出（南より）



6. 土塁上の遺物



3. 畝溝とPit検出（西より）



7. 土塁上の石と鉄滓



4. 畝溝とPit完掘（北より）



8. 鉄滓の出土状況



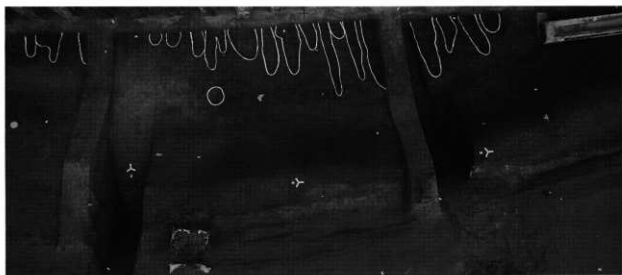
1. 西側調査区全景（北西より）



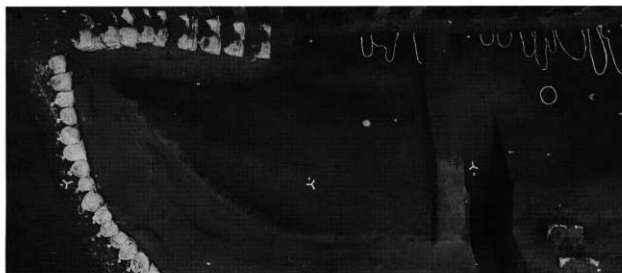
2. 西側調査区全景垂直写真



1. 西侧调查区土壁垂直写真(1)



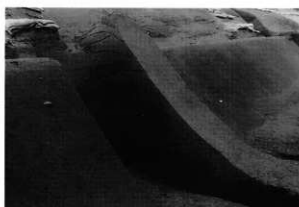
2. 西侧调查区土壁垂直写真(2)



3. 西侧调查区土壁垂直写真(3)



1. 土壘盛土状況 (ABセクション)



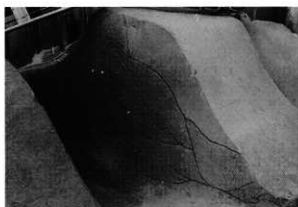
5. 土壘盛土状況 (CDセクション)



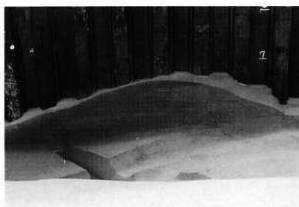
2. 土壘盛土状況 (EFセクション)



6. SD01・02 (GHセクション)



3. 土壘盛土状況 (EFセクション左)



6. 土壘盛土状況 (東壁セクション)



4. SD01と包含層 (EFセクション)



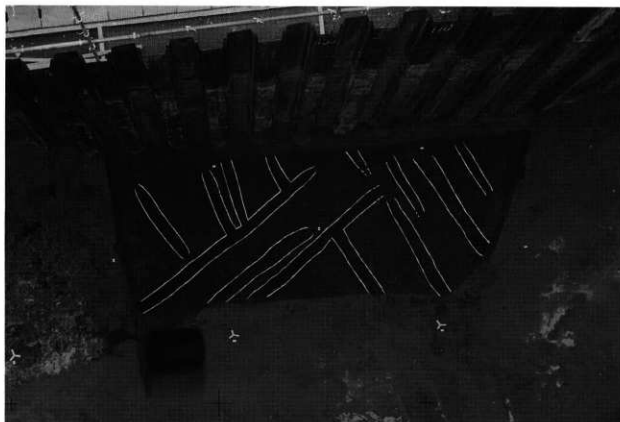
8. Pit覆土 (3区)



1. 土壁全景（南より）



2. 土壁全景（北より）



1. 東側調査区全景垂直写真



2. 第1層の遺構



4. 畝溝完掘状況



3. 畝溝検出状況



5. 東側調査区土層堆積状況



1. 改修前の土壁（北より）



2. 改修前の土壁（南より）



4. SD02完掘状況（北より）



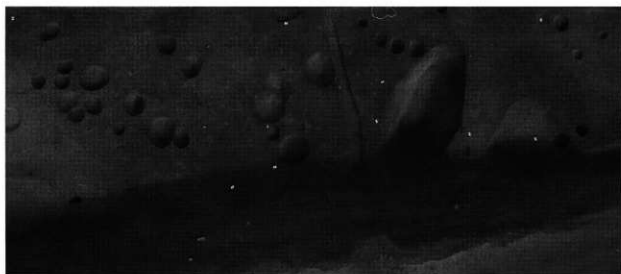
3. SD02検出状況（北より）



5. SD02完掘状況（南より）



1. 西侧调查区下層垂直写真(1)



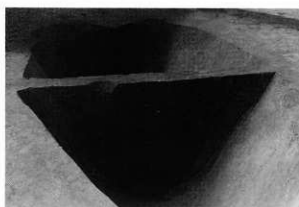
2. 西侧调查区下層垂直写真(2)



3. 西侧调查区下層垂直写真(3)



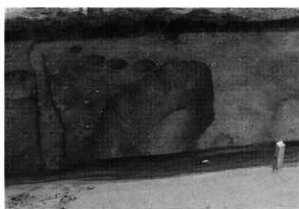
1. 下層の遺構（北より）



5. SK01土層断面



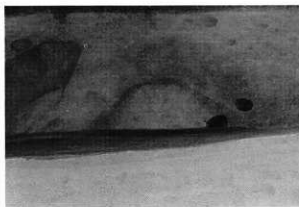
2. 下層の遺構（南より）



6. SK01



3. SD03・04



6. その他の遺構



4. SD03・04土層断面



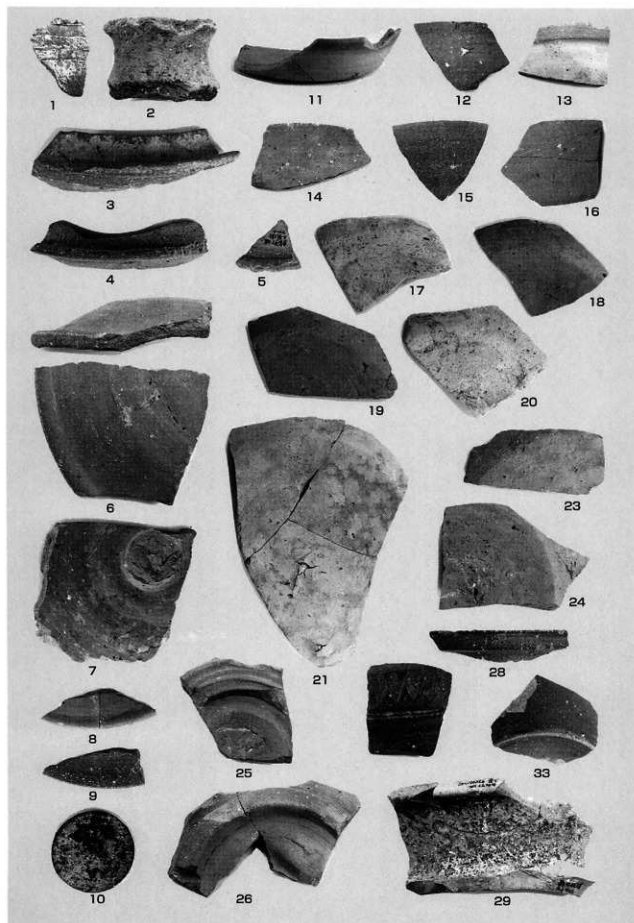
8. その他の遺構

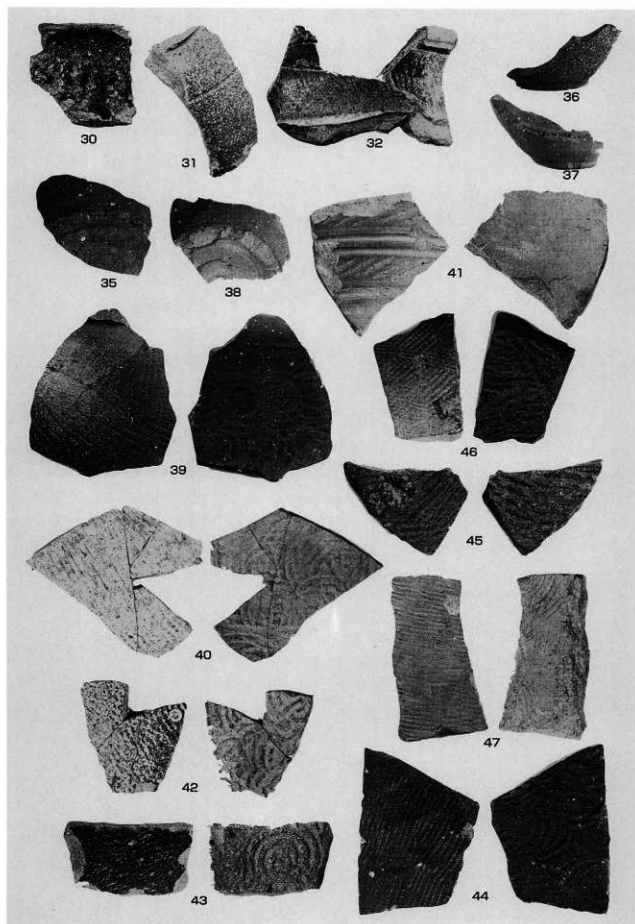


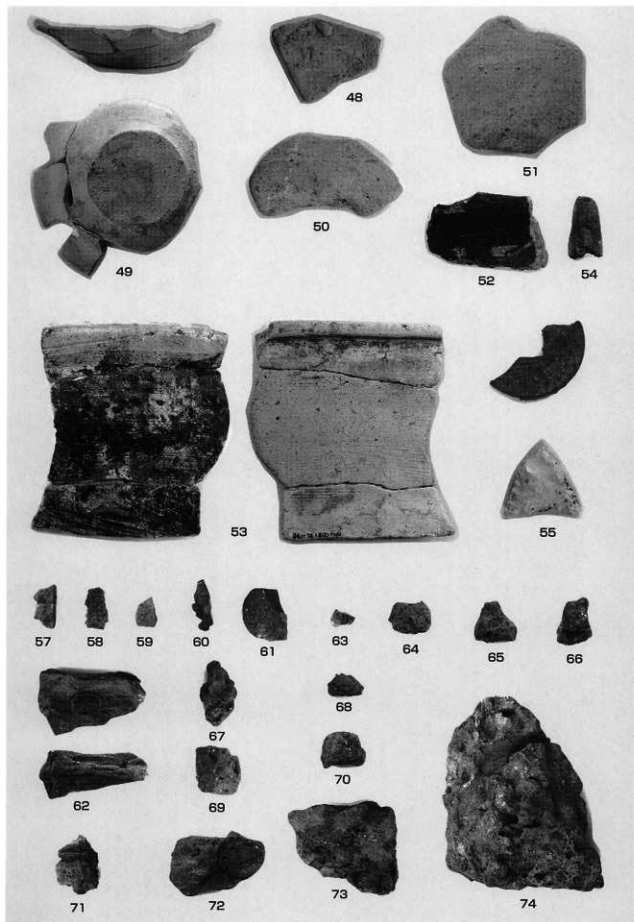
1. 西側調査区下層全景（南より）



2. 西側調査区下層全景（北より）







寺 家 遺 跡

一般国道249号交通安全施設整備(一種)工事に係る

—第13次発掘調査報告書—

平成12年 2 月29日発行

編集・発行 石川県羽咋市教育委員会
石川県羽咋市鶴多町亀田17番地
(羽咋市文化会館内)
〒925-0027
電話 (0767) 22-7131

印刷 北陸コロタイプ印刷
石川県羽咋郡志雄町子道甲60番地

